

平林2号墳

—西関東連絡道建設に伴う発掘調査—

2000.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

平林2号墳

—西関東連絡道建設に伴う発掘調査—

2000.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部



青銅鏡類



馬具類



武器類



裝身具類 1



裝身具類 2



裝身具類 3

序 文

本書は、山梨県埋蔵文化財センターが平成10年度に実施した、山梨県東山梨郡春日居町鎮目に所在する平林2号墳の発掘調査報告書であります。

平林2号墳は、甲府盆地北辺部にあたる春日居町吾妻屋山の裾部、標高305mに位置する直径約15mの円墳であります。墳丘は至る所で削平され、南東に開口する石室は側壁こそ良好なかたちで残存しておりますが、天井石はほとんどが持ち出されており2石ほどが辛うじて残っている状態でした。しかしながら石室内からは、装身具類、武器・武具類、馬具類、鏡など多種に富む副葬品が検出されました。このうち2面の鏡が発掘調査によって出土したことは当センターにおいては初見であり、特に注目すべき点と思われます。また、これらの資料から本古墳は6世紀後半に築造され、8世紀前半まで追葬が行われたと考えております。

本古墳の所在する春日居町には、本県最古の寺院である寺本庵寺や、甲斐国府跡が存在し、古代甲斐国の政治・文化の中心地として栄えたことは広く知られているところであります。北側の山麓一帯には、本古墳を含め40基あまりの後期古墳が分布し春日居古墳群と呼ばれています。その中でも、狐塚古墳からは銅鏡が寺の前古墳からは単鳳環頭大刀柄頭が出土しております。これらと併せ、今回の調査で発見された豊富な副葬品は、この地域の古代豪族の勢力を物語るものと言えましょう。

末筆ながら、調査にあたって多大なご協力を賜りました関係各位、地元の方々並びに、発掘調査・整理作業に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

1. 本報告書は平成10年度に西関東連絡道建設に伴い発掘調査された山梨県東山梨郡春日居町鎮目に所在する平林2号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は山梨県土木部から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本報告書は吉岡弘樹が編集し、第1・2章を深沢容子が、第3～5章を吉岡が執筆した。
4. 写真撮影は遺構、遺物ともに吉岡・深沢が行った。
5. 本報告書に関する出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 本発掘調査・整理作業の担当者および参加者は次のとおりである。
　　担当者：吉岡弘樹（山梨県埋蔵文化財センター　主任・文化財主事）
　　深沢容子（山梨県埋蔵文化財センター　主任・文化財主事）
　　作業員：天野字吉　天野かつ代　天野亀一　天野きみ子　天野駿一　天野藤吉　天野春善
　　天野ミツ子　長田久江　小俣靖子　久保健司　小林重成　齊藤永司　内藤由紀子
　　中込二三子　平本香代　山下勝美　山下正子
7. 本発掘調査では、次の機関　方々に貴重なご助言　ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。
　　春日居町教育委員会　株式会社文化財保存計画協会　藤造園株式会社
　　猪俣喜彦　瀬田正明　望月和幸　（順不同・敬称略）

目 次

図版1 青銅鏡類・馬具類・武器類
2 装身具類1・2・3

序文

例言

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

第3章 各説

第1節 位置	6
第2節 墳丘	8
第3節 内部施設	8
第4節 副葬品	11

第4章 まとめ

第1節 馬具類	30
第2節 青銅鏡	30
第3節 須恵器類	31

第5章 終わりに	33
----------	----

挿 図 目 次

第1図 平林2号墳と周辺の古墳群・遺跡	
第2図 春日井町の古墳	
第3図 発掘調査前地形図	
第4図 墳丘実測図	
第5図 墳丘立面図	
第6図 石室展開図	
第7図 墓方実測図	
第8図 遺物分布状況その1 (馬具・武具・武器類・その他)	
第9図 遺物分布状況その2 (装身具類・人骨)	
第10図 武器類実測図その1 (直刀・鞘尻・把頭・資金具・足金具)	
第11図 鉄鎌実測図	
第12図 小札実測図その1	
第13図 小札実測図その2	
第14図 馬具類実測図その1	
第15図 馬具類実測図その2	
第16図 装身具類実測図その1	
第17図 装身具類実測図その2	

- 第18図 装身具類実測図その3
 第19図 装身具類実測図その4
 第20図 青銅鏡実測図
 第21図 土器類実測図その1
 第22図 土器類実測図その2
 第23図 土器類実測図その3
 第24図 土器類実測図その4
 第25図 土器類実測図その5
 第26図 出土坏類分類図
 第27図 石材番付図

図 版 目 次

- 圖版 1 墳丘
 圖版 2 石室 トレンチ
 圖版 3 遺物出土状況 馬具類
 圖版 4 馬具類 武器類
 圖版 5 馬具類 武具類 土器類
 圖版 6 土器類
 圖版 7 土器類
 圖版 8 土器類
 圖版 9 土器類 調査風景等

表 目 次

石室石材計測表	36
装身具類計測表	38
出土土器計測表	48

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

西関東連絡道 山梨県土木部は、本県と埼玉県との経済・観光等の交流強化と、新山梨環状道路を介して、関越自動車道、中央自動車道、中部横断自動車道と連絡し、北関東地方と東海地方を結ぶ新たなネットワークを形成すること、および一般国道140号の渋滞緩和をはじめ、既存道路の交通機能の向上をはかるなどを目的とした西関東連絡道建設を計画した。その距離・構造は、埼玉県大里郡花園町から甲府市に至る、延長約110km、4車線の地域高規格道路となっている。

事業はまず、山梨市万力を起点とし、一般国道140号線の北側を並行して春日居町、石和町を通過し、甲府市桜井町へと至る、延長約6.2kmのバイパス建設工事から着手されることになった。沿線周辺には、いくつかの古墳や遺跡が分布しており、これらが路線内に入ってくる可能性が考えられた。特に、トンネルが建設される予定の大藏経寺山と吾妻屋山に挟まれた春日居町鎮目地区の山麓には、春日居古墳群の存在が知られていた。

踏査 平成9年5月、山梨県埋蔵文化財センターは、春日居町鎮目から甲府市桜井町に抜ける大藏経寺山トンネル春日居側開口部付近について踏査を行った。その結果、遺跡の存在は確認されなかったものの、春日居古墳群に属する平林2号墳が用地内に入ることが確認されたため、翌平成10年度に、工事に先立って本調査が実施されることとなった。

第2節 発掘調査の経過

試掘調査 平林2号墳の本調査に先立ち、平成10年4月16日より、大藏経寺山トンネル春日居側開口部からの路線内試掘調査を実施した。踏査および重機によるトレンチ発掘調査の結果、平林2号墳の他に古墳・遺跡などは発見されなかった。この結果を基礎として、5月14日より平林2号墳の本調査に着手した。調査前はブドウ棚が設置されている関係上、墳丘はいたるところで大きく削平されており、正確な規模を把握するのは困難であった。このため、墳頂を中心にして約700m²を調査区として設定することにした。表土剥ぎを実施しマウンドの検出とトレンチによる墳丘の截ち割りを行った後、石室内部の調査に入った。内部に流入していた土砂を除去し、出土遺物および石室の実測図作成と精査を順次行っていた。

また、当初は記録保存にとどめる予定であったが、調査途中で古墳を保存すべきとの声があがったため、学術文化財課、土木部等の関係機関で協議の結果、石室を解体して移築復元する方向で進めていくことになった。発掘調査は10月23日に終了し、11月9・10日には石室の解体が行われた。解体作業に際しては、調査担当者が立ち会い、写真撮影及び石材調査を行った。移築復元については、現在、具体的な事項についての検討がなされている。

平林1号墳 なお、遺跡地図等で平林1号墳とされていた箇所については、網目状にトレンチを設定し確認作業を実施したが、版築層や石室などは発見されなかった。これによって今まで平林1号墳とされてきた地点は、単なる地形の盛り上がりであり古墳ではなかったことが判明したことをここに付け加えておく。

平成10年（1998）4月24日 発掘通知を文化庁に提出

平成10年（1998）4月16日～10月23日 発掘調査

平成10年（1998）10月30日 遺物発見通知を日下部警察署に提出

平成10年（1998）11月9日～10日 石室解体作業

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

春日居町の地形 平林2号墳が所在する春日居町は、甲府盆地の北東縁に位置し、北から東にかけては山梨市、南は東八代郡一宮町・石和町、西は甲府市にそれぞれ接している。東西約4.5km、南北約5.7kmの町域は、北西から南東に伸びる不規則な長方形を成す。総面積は13.95km²で、その60%以上を山岳地帯が占めている。町の東部を笛吹川が南流し、重川、日川が合流する。集落は主に笛吹川の河岸段丘上に集中している。西北部を平等川が流れ、その奥に秩父山系の大藏経寺山（標高715m）、吾妻屋山（標高798m）、兜山（標高913m）、櫛山（標高1171m）などが連なる。西に南アルプス連山東南に御坂山系を望み、その中央に雲峰富士がそびえる。古代には、甲斐の国府が置かれ、政治、文化の中心地として栄えたといわれる。明治以降、米作に加えて養蚕が盛んとなり、それとともに製糸工業が発達した。戦後、養蚕業は次第に減少し、代わって温暖な気候と砂質土壤を利用した果樹栽培が急速に普及して、現在では町の主要産業となっている。

平林2号墳 平林2号墳は、町の西北部吾妻屋山の裾部、標高305mの地点に占地している。吾妻屋山と大藏経寺山とに挟まれた南斜面一帯には、40基あまりの後期古墳が分布しており、春日居古墳群と呼ばれており、平林2号墳もそのうちの1基である。

第2節 歴史的環境

甲府盆地北縁には山間部を中心に多くの後期古墳が分布している。これらは大きく3つのグループに分類され、東より、春日居古墳群、大藏経寺山古墳群、横根・桜井古墳群と呼ばれている。

春日居古墳群 大藏経寺山と吾妻屋山とに挟まれた南斜面を中心に分布する春日居古墳群は、現在41基が確認されている。全て円墳で、土塗墳と積石塚が混在している。これらは地域ごとに以下の9つの支群に分類される。

御室山支群 御室山支群は、大藏経寺山南東斜面の中腹、標高330m付近に立地する御室山古墳1基が確認されている。直径約11m、高さ約2mの規模で、石室幅の変わらない無袖型横穴式石室を持つ積石塚である。

保雲寺支群 保雲寺支群は、保雲寺周辺の標高270~320mの山裾に分布する。平林2号墳、寺の前古墳、寺の前3号墳、はたおり塚古墳、しづと塚古墳、狐塚古墳など10基の土塗墳より構成されている。石室で確認できるものは、石室幅の変化する無袖型横穴式石室である。狐塚古墳からは仏具である銅金冠が、寺の前3号墳からは環頭大刀柄頭が出土している。

平林支群 平林支群は、吾妻屋山南西斜面の標高330~410m付近に分布する。菩提塚古墳、日向塚古墳夫婦塚上・下墳、入定塚古墳など9基からなる。このうち夫婦塚上・下墳が積石塚と考えられ、その他は土塗墳である。

蠟燭塚支群 蠟燭塚支群は、吾妻屋山東斜面の中腹、標高410m付近に築造された蠟燭塚古墳1基が確認されている。直径22m、石室の長さ9mを測る土塗墳で、春日居古墳群中最大級の規模を持つ古墳である。

日影支群 日影支群は、大藏経寺山北東斜面の標高400~550m付近に分布する。比較的規模の大きい備前塚古墳、船石塚古墳など4基の積石塚からなる。石室で確認できるものは両袖型横穴式石室である。

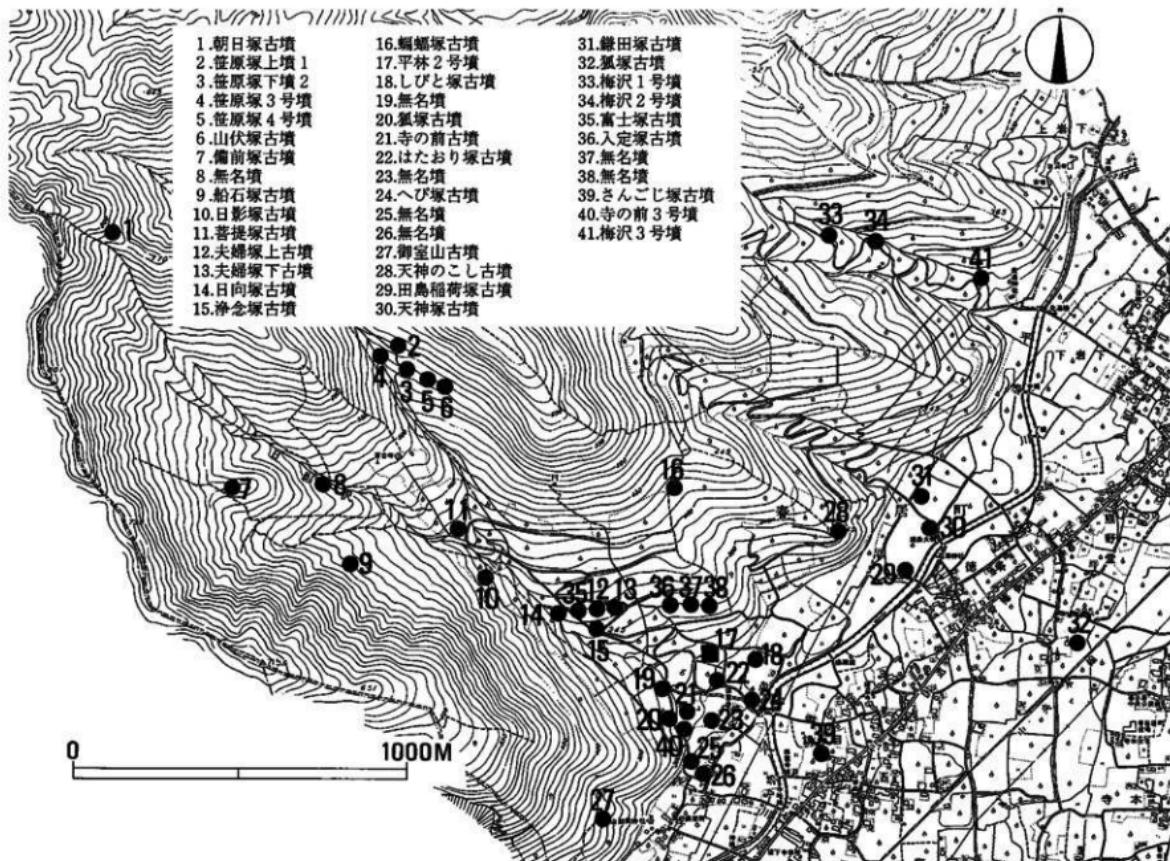
笠原塚支群 笠原塚支群は、吾妻屋山南西斜面の標高490~600m付近に分布する。直径16mの山伏塚古墳を中心とし、これに笠原塚1~4号墳を加えた5基の積石塚により構成される。このうち笠原塚3号墳については昭和53年に発掘調査が行われている。直径6m、高さ2m程の規模で、両袖型横穴式石室を持つことが確認され、鉄鏃が出土した。

朝日塚支群 朝日塚支群は、菩提山山頂より南東方向に延びる尾根の鞍部、標高780m付近に築造された積石塚の朝日塚古墳1基が確認されている。単独墳と考えられ、本県において最も高所に位置する古墳である。



第1図
平林2号墳と周辺の古墳・遺跡
 $S = 1/25,000$

- A.横根支群 B.桜井内山支群 C.桜井支群 D.桜井東支群
- E.大藏經寺裏支群 F.七つ石支群 G.鞍掛塚支群
- H.御室山支群 I.保雲寺支群 J.平林支群 K.蟻蟻塚支群 L.日影塚支群 M.笠原塚支群
- N.朝日塚支群 O.天神塚支群 P.梅沢支群
- Q.上町田遺跡 R.保雲寺遺跡 S.大尽遺跡 T.熊野南遺跡 U.熊野北遺跡 V.神東町遺跡 W.鴨田遺跡
- X.加茂東遺跡 Y.桑戸(後町)遺跡 Z.加茂西遺跡



第2図 春日居町の古墳

天神塚支群 天神塚古墳	天神塚支群は、鎮目字町田の平坦地に位置する天神塚古墳、田島船荷塚古墳、鎌田塚古墳と吾妻屋山の南東尾根の先端、標高300m付近に位置する天神のこし古墳からなる。4基とも土盛墳である。このうち天神塚古墳は直径35mを測り、春日居古墳群中最大の古墳である。また天神のこし古墳については昭和50年に発掘調査が行われた。片袖型横穴式石室であることが確認され、直刀、鐵鎌馬具、金環、土師器、須恵器などが出土している。
梅沢支群	梅沢支群は、吾妻屋山南東斜面の標高400～450m付近に分布する、梅沢1・2・3号墳により構成される。いずれも小規模な土盛墳で、無袖型横穴式石室を持つ。
大藏経寺山古墳群	大藏経寺山古墳群は、大藏経寺山南斜面に分布する。確認されている19基の古墳は全て円墳の積石塚である。本古墳群は3つの支群に分類される。
大藏経寺裏手支群	大藏経寺裏手支群は、大藏経寺北側の標高300m付近に6基が分布している。このうち、大藏経寺山15号墳の発掘調査が昭和59年に行われた。直径約12m、高さ約3.5mの規模で、無袖型横穴式石室を持ち、刀子、鐵鎌金環、玉類、土師器、須恵器などの遺物が出土している。
大藏経寺山15号墳	七つ石支群は、大藏経寺北西の標高350～400m付近に5基が分布する。この支群からは、馬具、直刀、鐵鎌などが出土している。
鞍掛塚支群	鞍掛塚支群は、大藏経寺山から南東に張り出した尾根の標高500m付近に、直径約10mで、竪穴式石室を持つ鞍掛塚古墳があり、同じ尾根上でさらに4基の古墳が発見されている。また大藏経寺裏手の東側山裾に3基の存在が確認されているが、既に消滅している。
横根・桜井積石塚古墳群	横根・桜井積石塚古墳群は、甲府盆地の北縁部、八人山（標高574m）南東斜面と大藏経寺山南西斜面に挟まれた地域に広く分布している。現在145基が確認されているが、すべて積石塚である。これらは西より、横根・桜井内山・桜井・桜井東の4支群に分けられている。
横根支群	横根支群は、八人山南東斜面、八人山と大藏経寺山に挟まれた南斜面から大山沢川によって形成された小規模な扇状地上に107基が分布している。このうち39号墳については、昭和60年に発掘調査が実施された。直径約11mで、無袖型横穴式石室を持ち、鐵鎌、刀子、ガラス小玉土師器、馬齒などが出土している。
桜井内山支群	桜井内山支群は、大山沢川によって形成された小扇状地から大藏経寺山南西斜面にかけて11基が分布する。昭和60年に9号墳の発掘調査が行われている。直径9.5mで、竪穴式石室を持つことが確認され、金環、土師器、須恵器、人骨などが出土した。
桜井支群	桜井支群は、大藏経寺山南西斜面、標高290～400m付近に24基が分布している。既に消滅した古墳のものとみられる、朱文鏡と勾玉が確認されている。
桜井東支群	桜井東支群は大藏経寺山南斜面、標高290～330m付近に3基が確認されている。
春日居町内の古墳時代遺跡	統いて春日居町内の古墳時代の遺跡に目を向けてみると、現在10ヶ所ほどが確認されている。 上町田遺跡は、天神塚古墳、鎌田塚古墳を含み、古墳時代初期の壇、中期の坏、高坏、後期の坏、壇などの出土がみられる。保雲寺遺跡は、古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。大恩遺跡からは古墳時代後期の坏が出土している。熊野南遺跡では、古墳時代後期の坏、壇がみられる。熊野北遺跡は、古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。寺本庵寺を含む神東町遺跡では春日居古墳群と同時代の住居址が発見され、壇、高坏、坏などが出土地で出土している。神東町遺跡の西に位置する鶴田遺跡でも、古墳時代後期の住居址が見つかっている。加茂東・加茂西遺跡はともに古墳時代から中世にかけての遺跡である。加茂東遺跡の東部に隣接する桑戸（後町）遺跡では、古墳時代中期の住居址と、坏、高坏、壇、壇などが発見されている。

第3章 各説

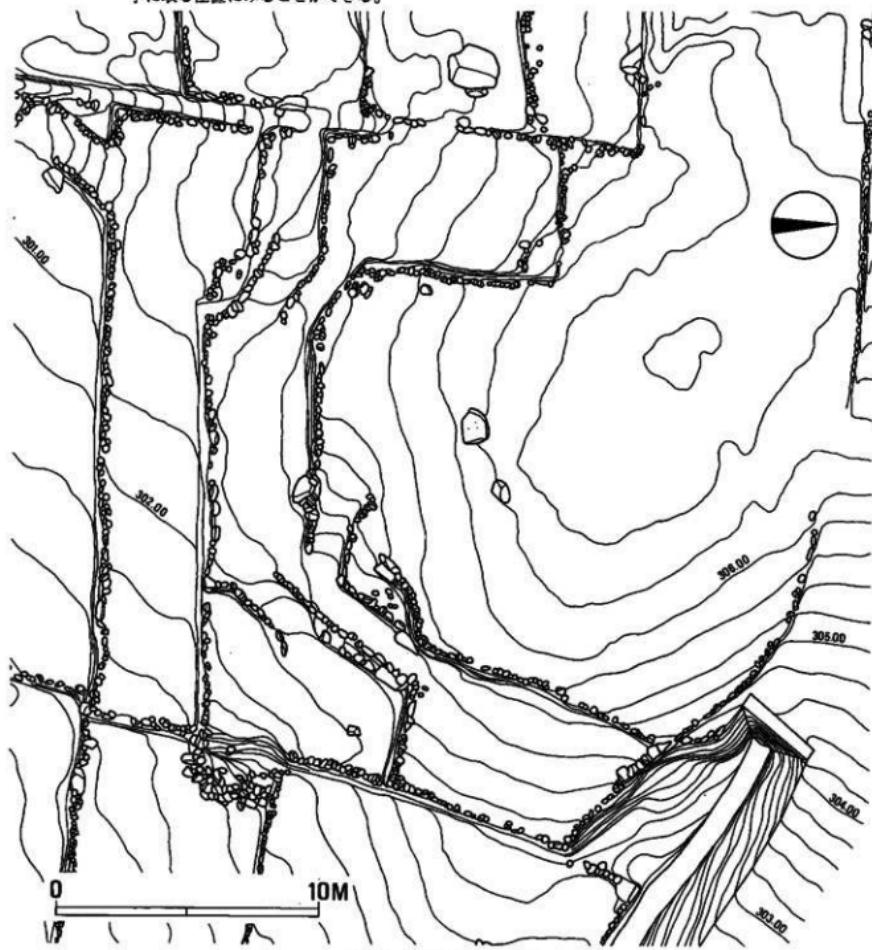
第1節 位置（第2図）

位置と立地

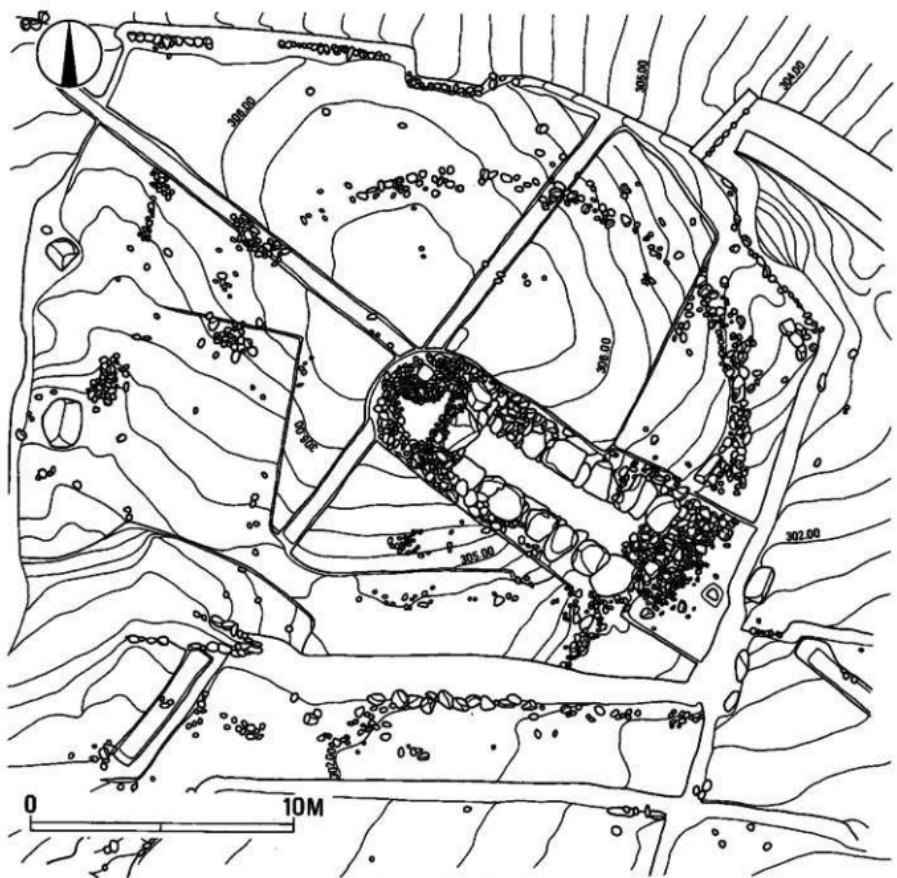
平林2号墳は、甲府盆地北側部の春日居町吾妻山の裾部の西向きの斜面（海拔約300m）に位置する春日居古墳群平林支群に帰属している。

入定塚古墳
狐塚古墳

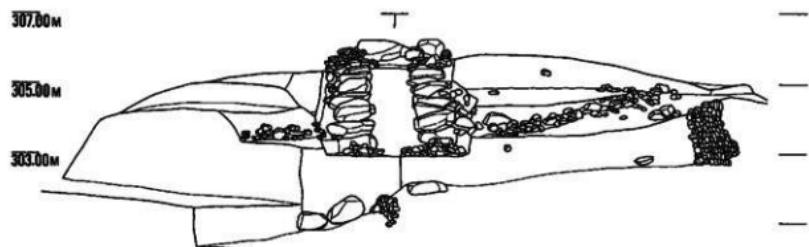
当墳の占地している地点は、西向きの裾部下方の緩斜面が上方に向かって急傾斜地に変化する変換点にあたる。この位置は、海拔約305mを計り、平林支群の中でも最も低い。北側約70mの葡萄棚の中には7世紀代の築造と推される無名墳がある。さらに上方に入定塚古墳などが占地し、盆地内を凝視している。また、浅い谷を挟んで対峙する大藏經寺山東側裾部には、銅鏡が出土している狐塚古墳など数墳が手に取る位置にみることができる。



第3図 発掘調査前地形図



第4図 墓丘実測図



第5図 墓丘立面図

第2節 墳丘（第3・4・5・6図）

調査前の状況

この地域一帯が葡萄・桃を主とした果樹地帯であるため、当墳上にも葡萄棚が設置され、墳丘もかなりの部分で削平されていた。その状況は、北側を除く三方は、2～3段の簡素な石積みが、1.5m程の段差を持つように構築されており、さらに、墳頂部では、若干の傾斜は残存されているもののほぼ平坦に近い形状になるようにカットされ、石室天井石や石室裏込めの一部までもが露呈しているといった惨憺たる状況であった。また、南面する石垣の断面からは石室両側壁が観察できた。このような有り様であるため、古墳の裾部分の確認は非常に難しく判断に苦しむが直径約15m前後の規模を持つ円墳と考えて間違いないと思われる。また、墳頂部から裾部までの比高差は古墳の立地が東→西の傾斜地にあるため大変大きく最低でも約4.65mを計っている。

墳丘断面

墳丘断面を観察すると、基本的には各トレンチともに、表土は墳頂に近い部分では約10cm以下で裾部に近づくに従って約50～70cmと厚い堆積をみせている。しかし、果樹灌溉用スプリンクラーが縱横に設置されているため、これに伴う多くの搅乱層も併せて確認された。この表土層下には、2層からなる版築層が認められた。上層である版築層Ⅰは、調査当初、版築されていない層と判断されていたが、その後の調査で土壤が軟弱化がかなり進行した版築層であることが判明した。版築層Ⅱは、非常に強く叩き締められており、地山層中に含まれている凝灰角礫岩のブロックを含むローム質土と茶褐色土+ローム質土が10～15cm厚の互層を形成している様子が明確に検出された。特筆事項としては墳丘西側斜面方向において、この2層の版築層間に排水または崩落防止とも推定される10～15cmの角礫で厚いレンズ状に構築されている疊層が広く確認されている。

第3節 内部施設

○ 石室（第6図）

石室主軸方位 N-57° 80' -W

床面海拔高度 303.580m

石室規模

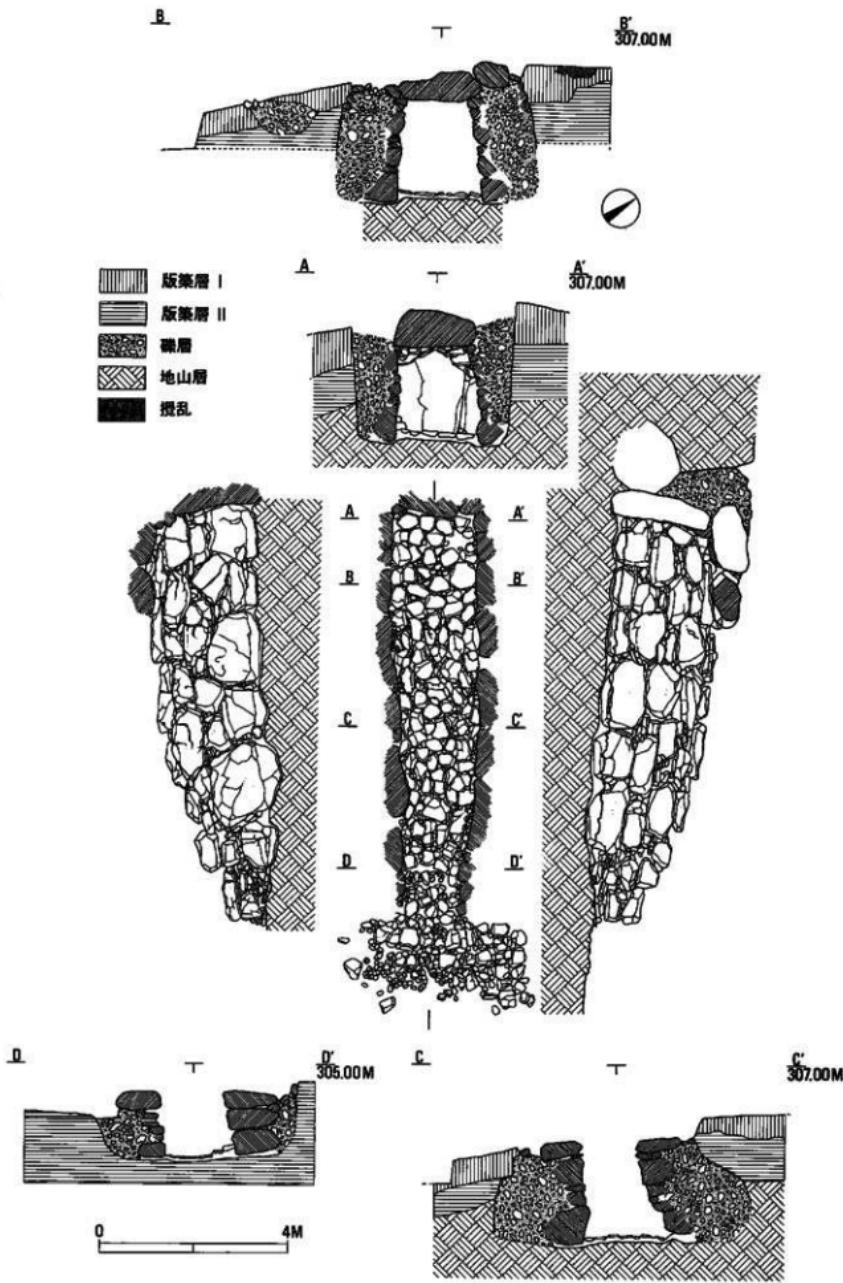
斜面に交差する形で安山岩系の割石を主体として構築された無袖形横穴式石室を内部主体とするもので、奥壁寄りは造存状態も良好に天井石を原位置のまま残している。しかし、石室前半部に向かうほど後世の搅乱を受け天井石はもとより側壁の一部まで抜き取られており、特に羨道部先端にその影響が大きくみられる。現状からの石室規模は、全長8.60m、奥幅1.89m、最大幅1.98m、を測り、玄室部の全体に極わずかに崩壊プランが確認できる。羨道部については、本来であれば欠損部より数石分は長かったと推測できよう。

天井石

天井石は、奥壁に接続するものとその前に1石の計2石が残存している。奥壁寄りのものは、縦70cm、横225cm、控え156cm、重量3.600kg、前寄りのものは縦60cm、横110cm、控え170cm、重量1.400kgを測る。奥壁や側壁上端との接続部には、10～20cmの円・角礫を詰めて調整を計っている。また、高栄状態は、側壁の高度から判断すると、3～4石目に最高位を持たせるアーチ形状を取っていたと思われる。なお、現況での最高位は床面から215cmを測る。

奥壁

奥壁は、大小4枚の礫からなる。中央から左側にかけて縦210cm、横170cm、控え46cm、重量2.400kgの扁平なやや加工を加えた礫を設置し、その右側に縦145cm、横76cm、控え40cmの礫を据え、両石の上側には、50cmほどの角礫を置く。また、全体に平均10°の内傾がみられる。天井部、左右側壁上部との接続については、直接に重なりを持たせることなく角礫の小口積みによって高度を調整している。さら

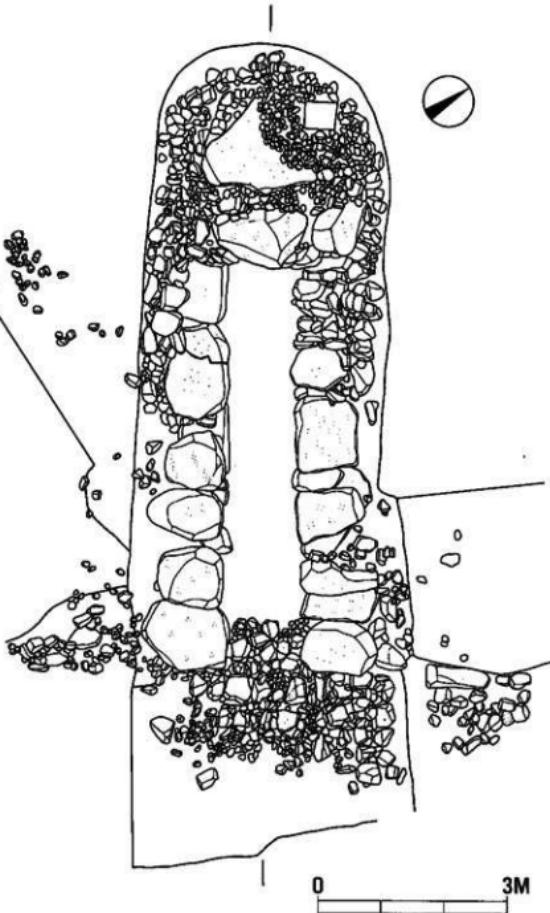


第6図 石室展開図

に、特筆事項として、
裏込め大型の礫を置
き、壁の安定を図っ
ていることを付け加
えておく。

側壁

側壁は、石室の前
方部においていくつ
かの礫の喪失がみら
れる。高さは、およ
よそ2.10mを測り4
～5段を積み上げて
いる。右側側壁にお
いては、4～5段築
成の石積みが構築さ
れている。山側とい
うこともあり、強い
土圧が加わり内傾が
大きい。また、中央
付近では、孕みの大
きな原因となる縦目
地の通りがみられる。
基底部（根石）
の状況は、奥壁より
3石が50cmほどの長
さの揃った礫を横口
積みに、続く3石は
60～80cmとやや大き
さにばらつきのある
大振りの礫を横口あ
るいは広口積みに使
用している。中段か
ら上段にかけては、
横口と小口積みを行



第7図 墓方実測図

っている。左側壁は、基本的に4段の石積みが構築されている。しかし、谷側ということもあり、石室入り口付近での礫の喪失が著しい。また、大きな縦目地ではなく孕み自体はほとんどないものの、やはり山側からの土圧の影響からか石積みが直立に近い角度に立ってしまっている。根石は、奥壁から6石まで50～90cmの礫を横口積みに使用している。中段から上段にかけては、右側と同様に横口と小口積みを行って対応している。双方の壁を比較してみると、土圧の加わり方を考慮して構築したためか明らかに左側の方が大振りの礫を設置していることが分かり、築造当時は、地形を良く把握して造られた持ち送り技法を備えた石室構造であったことが良く理解できる。

狭道部

狭道部は、D-D'ラインより入り口側がそれに当たると考えられる。非常に遺存状態が悪く、2～3段の小振りの礫の石積みしか残存していない。

石室全体の床面には、全面に床石が確認された。床は、1面のみで掌大の扁平な割石を並べ、隙間に小円礫を詰める構造をとる。検出時の状態は平坦ではなくかなりの起伏が認められた。これは、後世での二次的使用が原因と考えられる。また、閉塞石が認められなかった点もこの理由によるものとみられる。

○ 墓方（第7図）

墓方は、上面では全長約10m、幅約4mのU字状を呈している。地山を削平して造った面上に版築を重ねながらマウンドを構築していくと同時に石積みも積んでいく工法を取ったと考えられる。このため、C-C'、D-D'ラインなどにおいては袋状の墓方となってしまっている。墓方の底面は、端に沿うように根石が据え付けられている。根石は、安定度を増すことに加え石積みが容易に行えるための調整から、底面を抉るように掘り込み設置されている。

第4節 副葬品

○ 出土状態（第8・9図）

石室内床面直上および入り口部分、墳丘南側よりそれぞれ遺物が出土している。玉類は、石室中央に密なまとまりをみせるほか、奥壁近くの両側壁、奥壁から約5.5mの右側壁寄りにも分布が認められる。他の副葬品については、第7図にある状況で検出された（A地点—刀装具・鉄鎌、B地点—鏡・金環・鉄鎌、C地点—鉄鎌、D地点—土器類・鉄鎌、E地点—直刀・小札・馬具類・金環・鉄鎌、F地点—馬具類・鉄鎌）。また、人骨は、奥壁部分と中央や入り口寄りから検出されたが古墳時代当時の被葬者のものかは判断できない。

なお、土器類に関しては石室内からの出土は数片のみにとどまっている。しかし、石室入り口部と墳丘南側石積み裏込めより多量の須恵器が検出された。近接地に古墳の存在は認められず、これらの遺物は本古墳の副葬品と考えて良いと思われる。

当墳の石室内の状況は、土器類のみが石室外に持ち出されていた点や、昭和期（戦前か？）において農機具の収納施設として使用されたとの地元古老の話などから推測するに副葬品が埋葬時の原位置をとどめていたとは言い切れるものない。

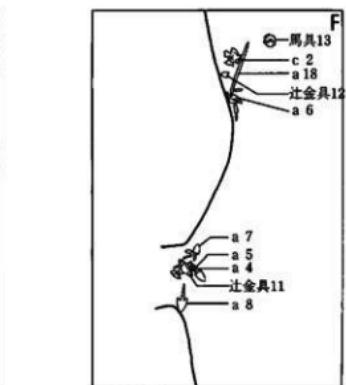
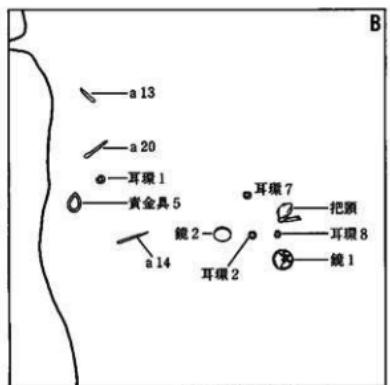
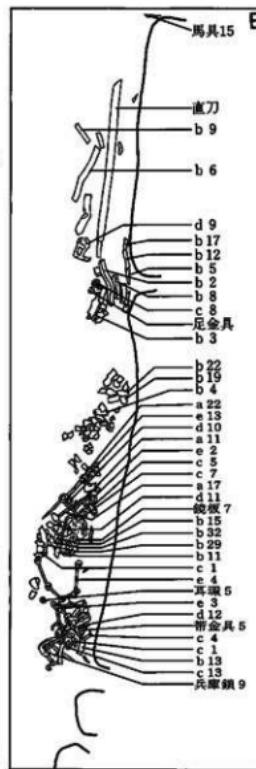
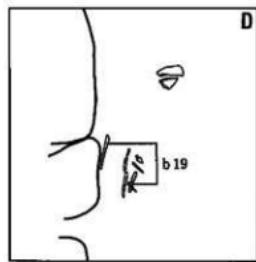
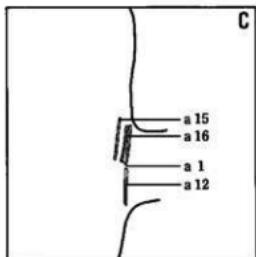
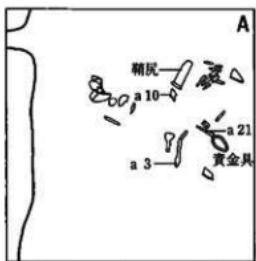
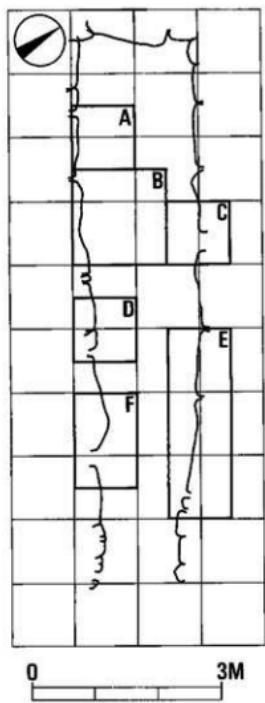
＜副葬品一覧＞

武器類	直刀 1 鞘尻 1 把頭 1 貴金属 2 足金具 1 鉄鎌 24以上
武具類	甲冑・小札類 50以上
馬具類	轡 8 兵庫鎖 2 汗金具 2 鞍 8 鏕具 4
装身具類・その他	管玉 1 素玉 1 勾玉 4 切子玉 1 靖峰玉 3 丸玉 121 小玉 200
土器類 須恵器	壺 12 壺蓋 18 高壺 2 隆 2 平瓶 4 長颈壺 6 大壺 10
土器類	壺 5

○ 武器類

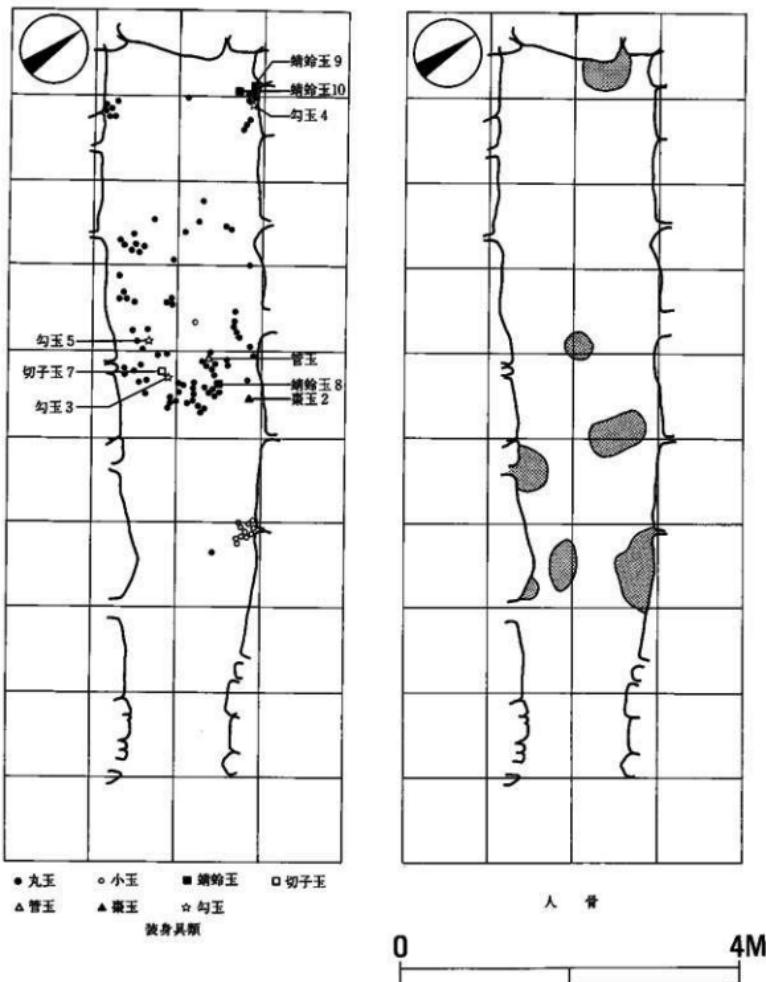
A 直刀（第10図1）

石室中央や入り口側の右側壁沿いに並行になるように鋒を奥壁側に向けて検出された。鋒と茎の一



a 鉄環
b 小札
c 鏡
d 錫具
e 帶

第7図 遺物分布状況その1 (馬具・武具・武器類その他)



第8図 遺物分布状況その2（装身具類・人骨）

部を欠損しているものの全長74.1cm、刃渡り66.2cm、把元から茎先まで7.6cmを測る。刀身は、鞘元近くで2.82cmの幅を持ち、鍔を持たない平造りタイプで、鋒は直線的なカマス錐の形状をとる。背は角背であり、7~8mmの幅を測る。茎は目釘孔より先が欠損している。また、保存処理中のクリーニング作業においてわずかではあるが鞘元に銀象眼が確認された。

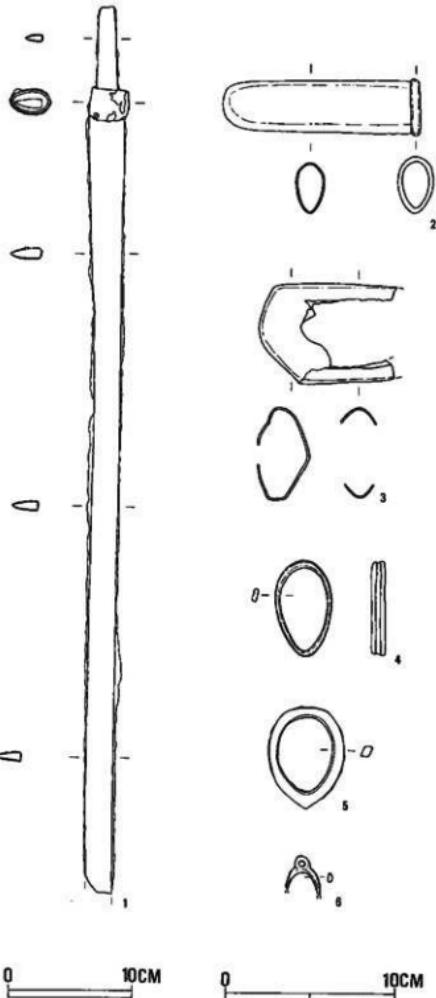
B 鞘尻（第10図2）

石室内奥壁近くから出土したもので、長さ11.71cm、幅3.13cmの大きさを測り3.49×2.11cmの資金具が

付く。外側は薄い青銅で仕上げられており、資金具と共に鍍金が施されている。内側には木製の鞘本体と刀身が残る。

C 把頭（第10図3）

奥壁より入り口に向かい約3メートル地点の床面直上から出土した。6.00×8.19cm、厚さ3.08cmの大きさを持つ。材質は青銅製で鍍金されている。また、内側には決して良好とはいえないが木質部が残存している。製法は、薄い青銅の板に縁を付けながら折り曲げていったものと推される。



D 資金具（第10図4・5）

4は精尻に近い地点より出土したもので、素材の青銅に鍍金を施して仕上げている。形状は卵形を呈し、5.60×3.31cm、幅7.6mmを測る。側面には、周囲を巡る1条の沈線が細工されている。5は6.07×4.55cm、幅5.0mmを測る。4とは違い鉄製である。

E 足金具（第10図6）

激しい腐食のため過半部を欠損している。しかし、腰に佩びるための8.45mmのリング状の部分は残存している。

F 鉄蟲（第11図）

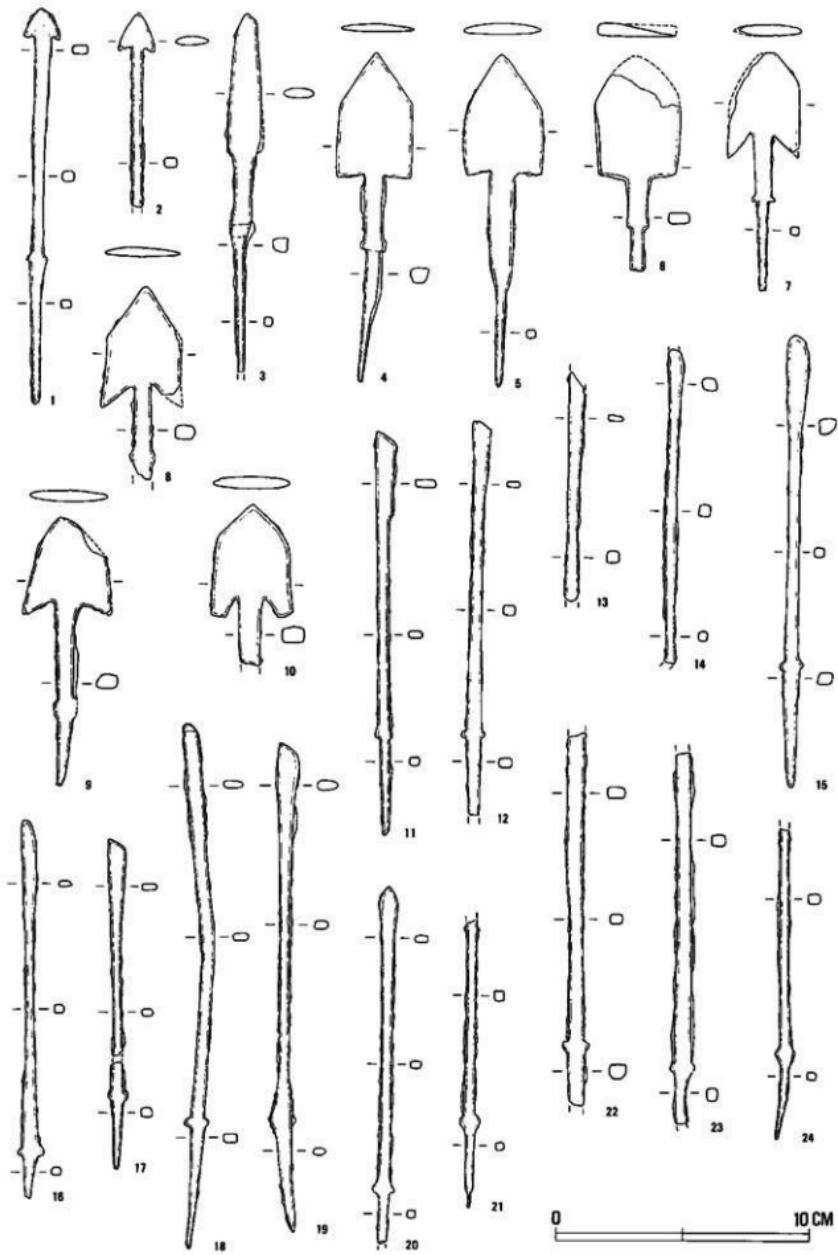
第7図A～Fにみられるように遺物集中箇所にはほとんど鉄蟲の分布が確認された。すべて有基式で図示し得たもの他、先端部や茎部の小破片化した残骸も多く出土している。今回は後藤守一の分類を基本としてそれぞれの名称を判断した。

第9図 武器類実測図その1

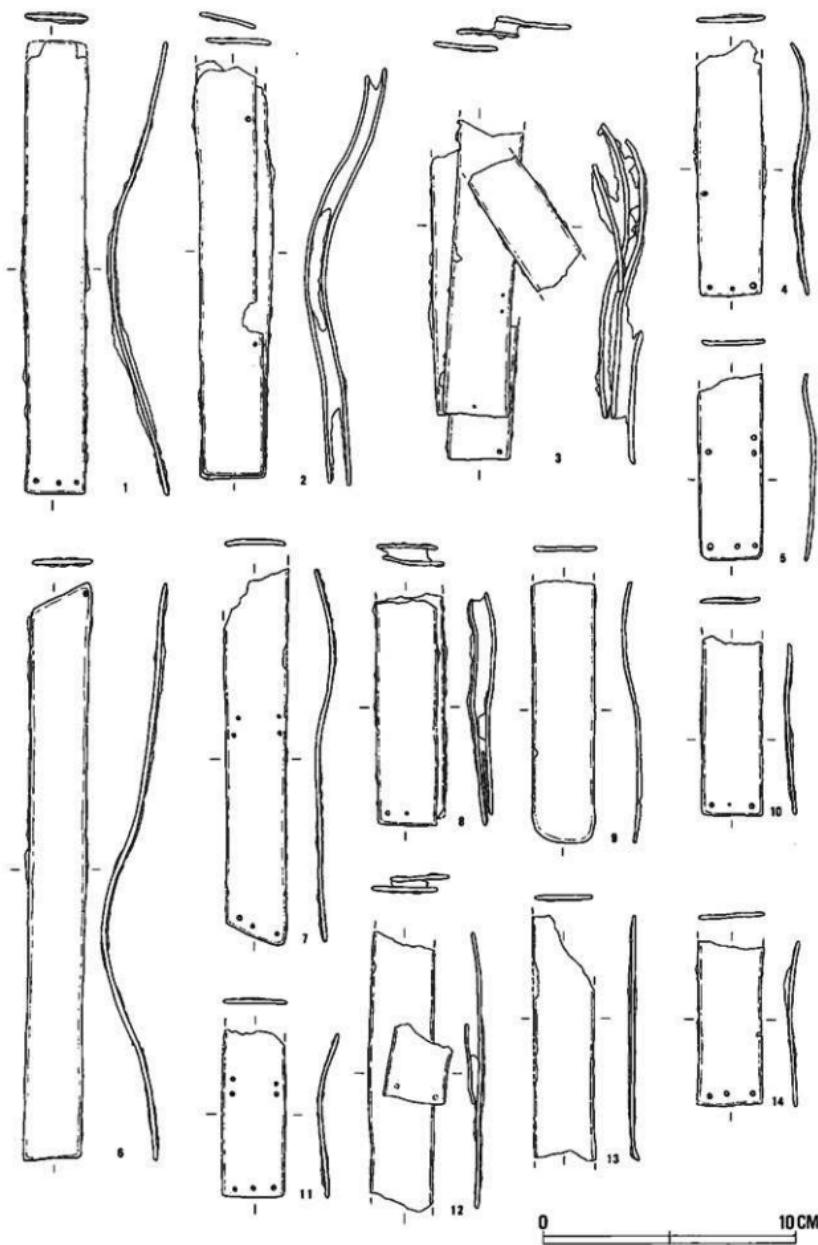
（直刀・鞘尻・把頭・資金具・足金具）

有茎平根式

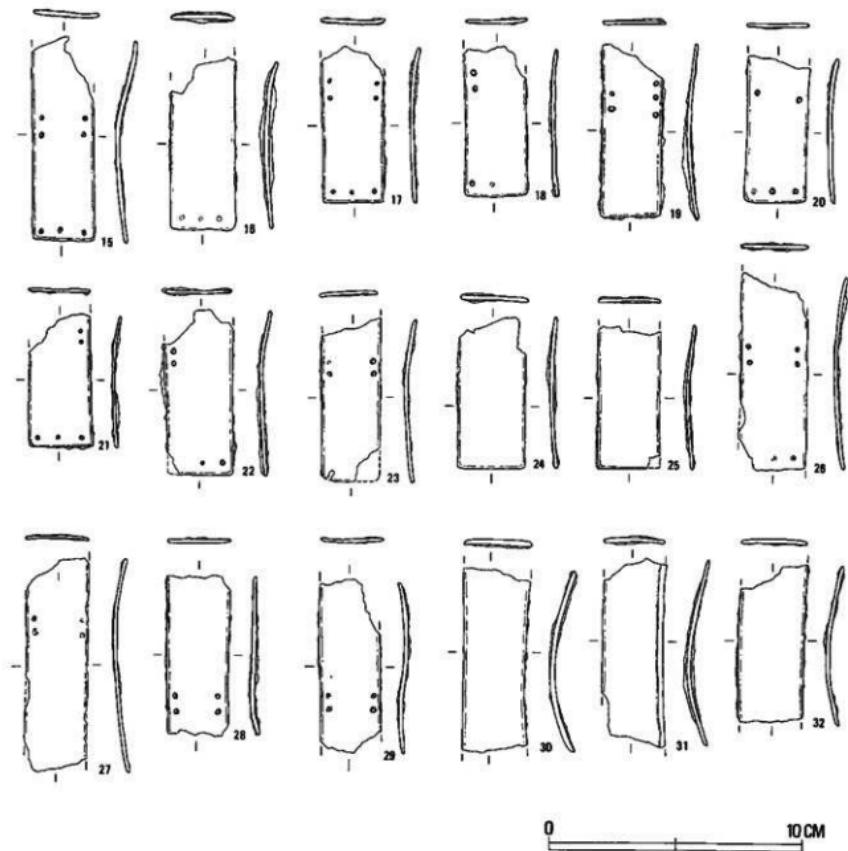
有茎平根式に分類されるものは10点ある。1・2は小型の穂先を持つ三角形狭鋒長茎範被式である。3は柳葉状の細長い穂先を持つ平造切刃柳葉式である。4～6は五角形式、7～9は広鋒平造範被五角形式、10は雨丸造広鋒正三角形勝抜式にあたるものと思われる。



第11図 鉄鎌実測図



第12図 小札類実測図その1



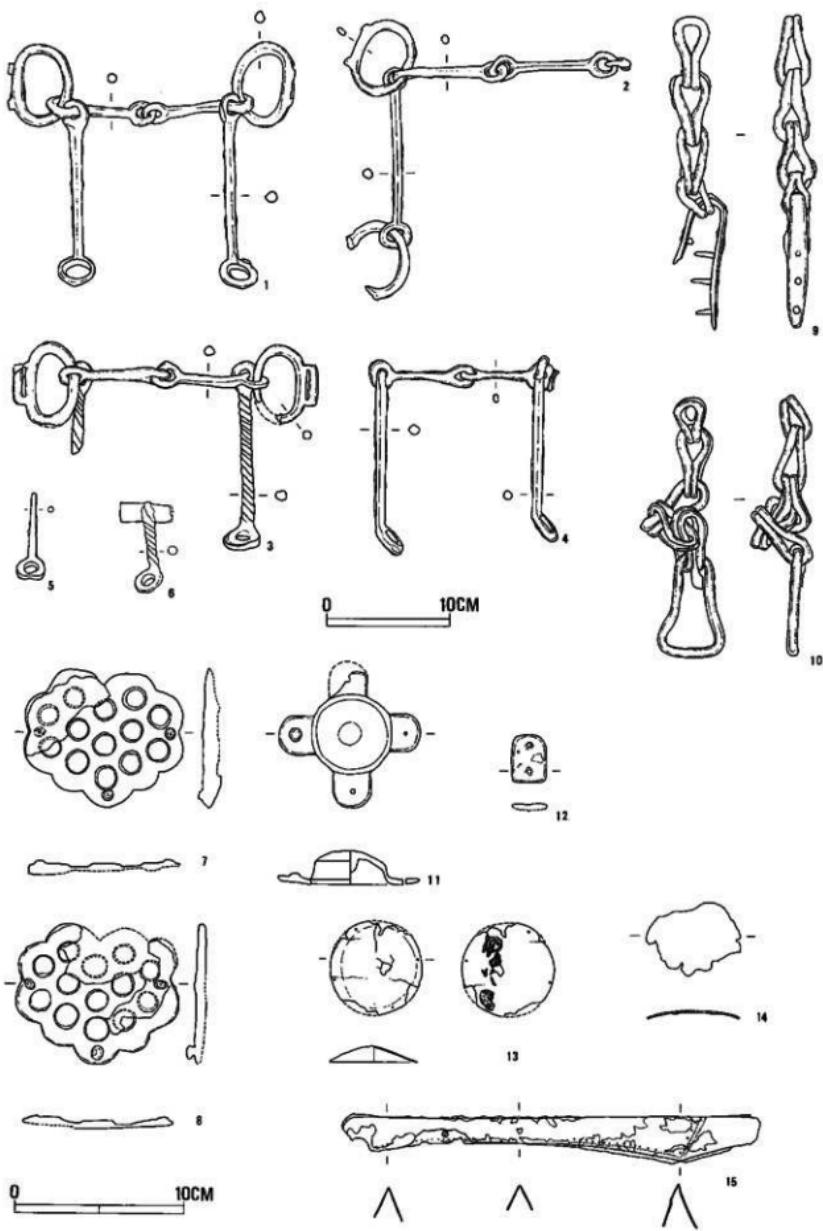
第13図 小札類実測図その2

有茎尖根式
有茎尖根式には片關片刃箭式(11)、先片刃箭式(12~19)、端刃鑿箭式(20)の三型式がみられる。
またこの他にも茎部のみの出土のもので21~24も有茎尖根式に帰属するものと考えられる。

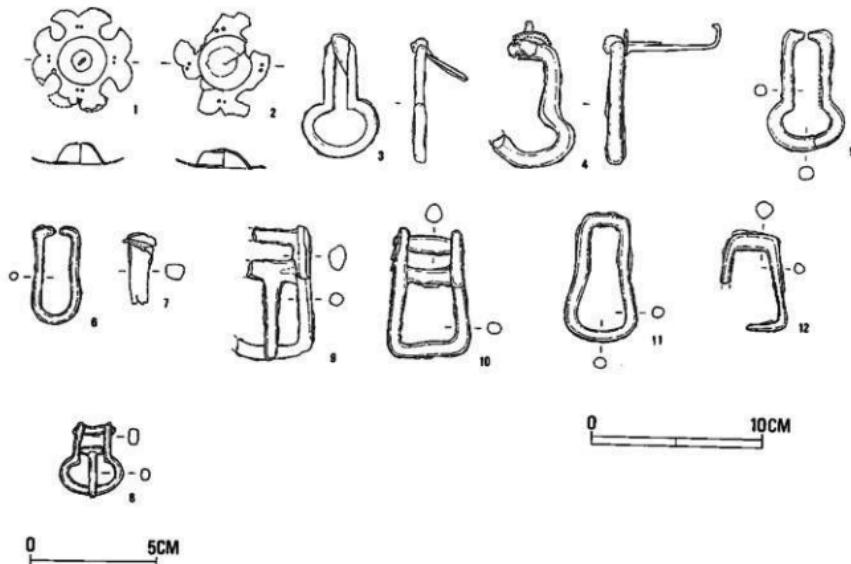
○ 武具類

A 甲冑・小札類(第12・13図)

石室中央より入り口側の右側壁側から集中して検出されたが、そのほとんどが欠損しているため正確な数量を摂むのは難しい。形状は全て短骨状を呈しており先端に丸みを帯びているものや方形状のものは当壙からは出土していない。最大のものは6であり $22.8 \times 2.5\text{cm}$ 、厚さ 0.3cm を測る。最小は24の $5.9 \times 2.8\text{cm}$ 、厚さ 0.35cm である。小孔の位置や数量については、多少の違いは認められるが基本的には、隅部に穿たれているといえる。また、甲冑のどの部位に使用されていたのかは不明である。今回の調査では鉢は1点しか検出されなかったため小孔は鉢止めではなく革などの紐にて結束されていた可能性が高い。



第14図 馬具類実測図その1



第15図 馬具類実測図その2

○馬具類

A 帶 (第14図1~8)

鉄製素環鏡板付帶

1~3は鉄製素環鏡板付帶である。1は横6.60cm、縦4.95cmの横円形の鏡板を持つ。立間は欠落しており形状の把握は出来ないが欠損部の状況から幅約7cmを測るものと判断できる。街は、全長16.5cmで両端を環状にした丸棒を中心で連結し、他方を鏡板の環体と引手に接続させている。また、引手は街と同じく丸棒の両端を環状に成形して一方をやや「くの字状」に折り曲げている。長さは、15.65cmを呈する。2は1と比較してやや大振りではあるが同様の構造を示す帶である。鏡板は片方しか残存していない。横6.24cm、縦4.94cmの大きさで形状は横円形を示す。立間は欠損しているものの幅約7cmを測る状況は読み取れる。街は両端を環状にした丸棒を中心で緊ぎ端部を鏡板と引手に接続させている。引手も片側しか残存していない。長さは14.42cmを測る。また、手綱側には意図的なものかは判断できない直径6.28cmのリングが存在する。3は街の長さ15.75cmを測る。丸棒の両端を環状にし中央で連結している。さらに端部には鏡板と引手が取り付けられる。鏡板は横6.95cm、縦5.36cmを測り横円形を呈している。立間は方形状で良好な状態を残し横3.30cm、縦1.05cmの大きさを持つ。引手は片側が途中より欠損している。長さ15.08cmで丸棒の両端を環状にした上に巻きを加えている。また、手綱側は「くの字状」に折り曲げられている。4は鏡板部分が欠落して街と引手のみの検出となっている。街は他の帶と同じく丸棒の両端を環状にしたものと2つ連結させ15.0cmの長さを作り出している。引手はやはり丸棒の両端を環状にし片側を街の一端に接続させる。また、手綱側は「くの字状」に折り曲げられる。長さ14.9cmを測る。5・6は引手の手綱側である。7・8は一对の花形鏡板(九曜文鏡板)で4に接続されていた可能性を持つものである。縦8.02cm、横9.06cm、厚0.63cmを測る。9葉の花を持ち、中側には直径約1cmの円形文が13個付けられている。9葉に13の円孔を形取った鉄板に鍍金された青銅版を被せ3箇所にリベット止めをする製作技法をとる。

B 兵庫鏡（第14図9・10）

2点が出土した。9は4連の鏡の下に長さ約8cmのU字型金具が垂下している。また、10には5連の鏡の端部に鉢具（長さ約6cm）が連結されている。

C 鉢金具（第14図11・12）

11は全体に鍍金が施され、直径4.80cmを測る偏円形の鉢部に4つの脚（1.98×2.19cm）を取り付けられている。なお、脚には1箇所鎖止め用の小孔が開けられ、そのうちのひとつには鉄が残存している。12は、脚部であり11と同様に鍍金されている。鎖止め用の小孔は2箇所に開口されている。

D 簪（第14図1～8）

1・2は鍍金された縦の座金具である。断面形は扁平な偏円形の鉢部を呈し、四方に突出部を設けている。突出部にはそれぞれ2箇所並列に小孔が穿たれる。さらにその小孔の一部には糸状繊維の付着が観察できる。3～8は鉢具形式の簪である。4・7については鍍金された周囲に列点文を刻んだ橢円形の座金具を付けている。また、8は帆立貝形状の鉢具で長さ3.0cmと小型のもので座金や刺金は接続されていない。なお全体に鍍金がされている。

E 鉢具（第15図9～12）

4点の出土をみた。しかし、全て欠損したものであり完存しているものはない。9は輪全部の一部、10・11は刺金、12は輪金の一部と刺金が欠損している。

G その他（第14図13～15）

共に使用された部位など不明な金具である。13・14は同形態をとるもので13についてはほぼ完存している。直径約5cmの浅いドーム状の形態を呈しており四隅に1mm程の小孔を穿っている。非常に薄い青銅製の板に鍍金したもので裏面には布の付着がわずかに観察できる。15は長さ25.05cm、最大幅2.81cmを測る青銅製の板に鍍金が施された大型の金具である。断面形はV字状を示す。周縁部には大小の列点文が二、三重に廻る。

○ 装身具・その他

A 管玉（第16図1）

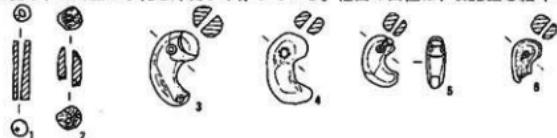
全長2.30cm、径0.66cmを測り、0.23cmの小孔を片側より穿っている。他面の口径は、0.12cmと細く平滑に研磨されている。

また、断面形は正円形

を呈している。色調は、

濃緑色で材質は碧玉製

である。



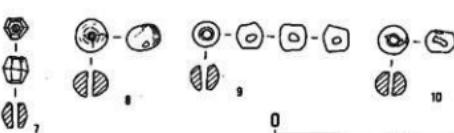
B 棋玉（第16図2）

2は、質の悪い琥珀

製で1/2欠損している。

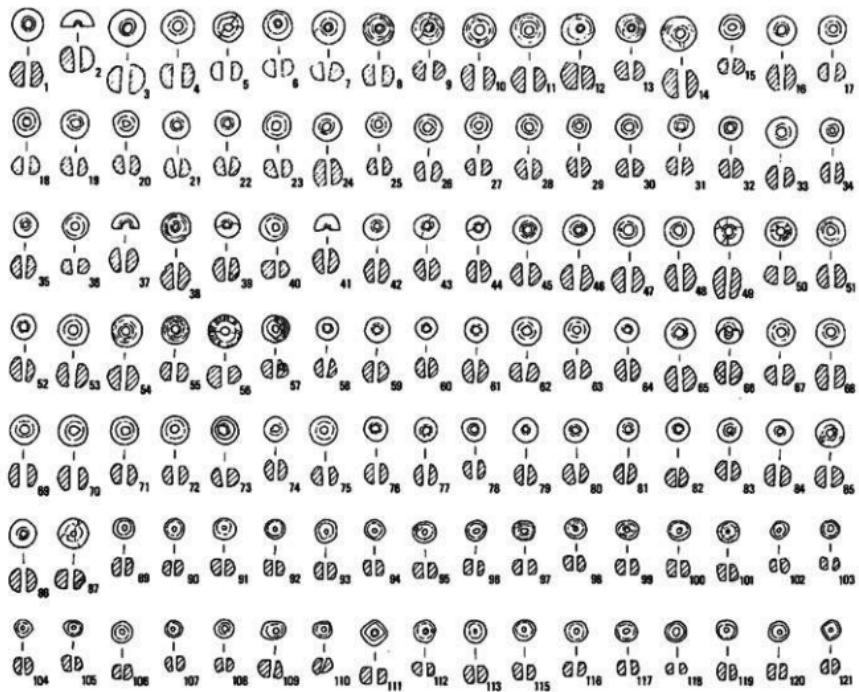
色調は暗茶褐色を呈し、

片側より0.33cmの孔を

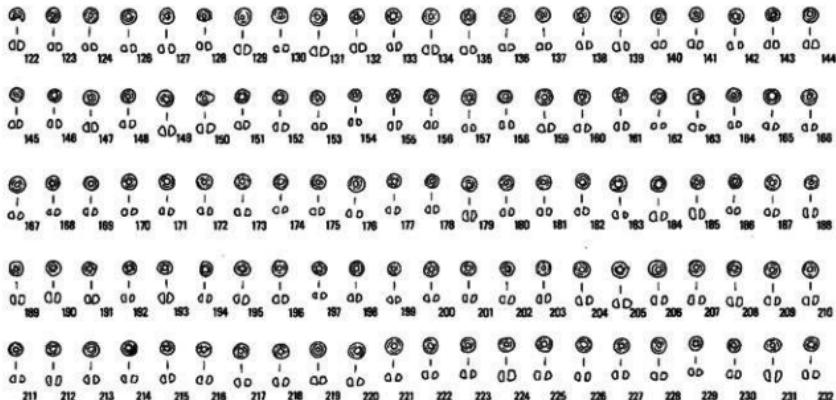


0 5CM

第16図 装身具類実測図その1

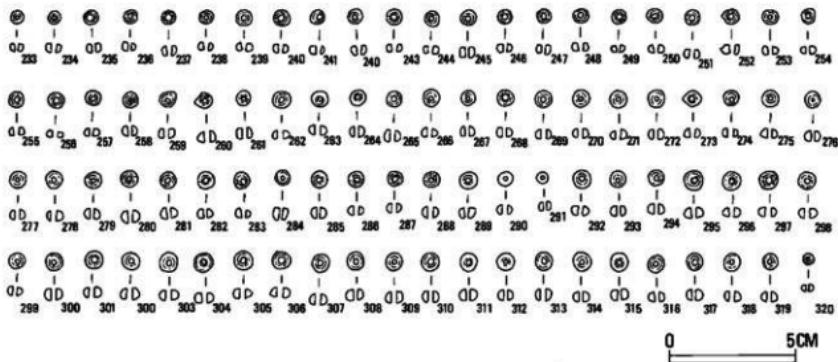


0 5CM



0 5CM

第17図 装身具類実測図その2



第18図 装身具類実測図その3

穿っている。

C 勾玉 (第16図3~6)

4点が出土している。3は、淡緑色の翡翠製でC字状を呈している。孔は、片側より穿たれている。全長3.01cm、径1.02cmを測り、重量は9.15gを示す。2は、質の悪い瑪瑙製で乳黄白色の色調を示す。孔は両側から穿孔され面取りがなされている。形状はコの字状を呈しており、全長2.89cm、径0.82cmを測る。なお、重量は5.28gである。3は、良質の翡翠製でC字状の形状を持つ。色調は濃緑色を示し、全長1.98cm、径0.69cm、重量3.21gを測る。孔は、片側から穿たれている。また、穿孔部の周囲には3本の刻み目が作られており古い様相を伺わせている。4は、緑色を呈する質の悪い鉛ガラス製で1/2程が欠損している。

D 切子玉 (第16図7)

小型のものが1点検出するにとどまった。水晶製であり六面体を成す。全長0.99cm、径0.87cmを測る。片側から0.27~0.12cmの大きさの孔を一方向に穿っている。孔部分は、面取りがされている。

E 靖姫玉 (第16図8~10)

全長1.02~1.07cm、径1.09~1.26cmを測る3点が検出された。紺色のガラス素材の側面に、淡乳黄色の斑文を1~3箇所作り出している。

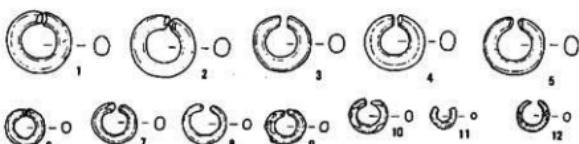
F 丸玉 (第17図)

総数121点が出土した。色調は、淡水色・紺色・濃緑色系統のものが大半を占める。材質の内訳は、アルカリ石灰ガラス製が115点、鉛ガラス製5点、滑石製が1点である。大きさは、径0.94~1.31cmまでの大型のものと径0.41~0.70cmまでの小型のものに大別できる。前者は、素材から切り離した後にやや扁平ではあるが明瞭な球形状に成形しているのに対し、後者は、素材から切り離した後に簡単な面取りを加えたのみにとどまる円柱状の形態を取っている。

G 小玉 (第17・18図)

作図可能なものが200点出土している。そのほとんどは石室内土壤の水洗選別により検出されたものである。色調は、水色・淡水色・紺色の3色に分類できる。材質は、すべてアルカリ石灰ガラスである。

大きさは、0.47～0.36cmを測り、成形は、素材から切り離した後に扁平な球状に仕上げている。



H 耳環（第19図）

1～12)

大小6点ずつ、合計

12点が石室床面より検

銅芯金貼型金
環

出された。いずれも銅
芯金貼型金環であるが、
小型のものについては、
保存状態が悪く金の剥
落が進んでいる。大型

のタイプである1～5

は、長径2.29～2.61cm、短径2.17～2.41cm、厚さ0.52～0.61cmを測る。1・2・4については、切れ目部分の腐食がやや進み鏽の付着が観察できる。6～12は、小振りのタイプとなり長径1.81～1.00cm、短径1.63～1.28cm、厚さ0.39～0.21cmを測る。7においては切れ目部分のみに、他の6・8～12については全体に腐食が進行し鏽の吹き出しが著しく鍍金部分が消滅している部位がみられる。

I 帯金具・その他（第19図13～19）

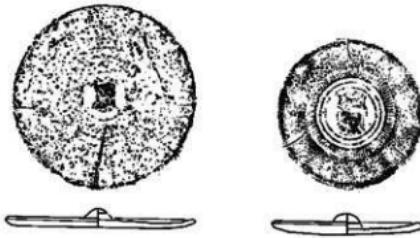
飾り金具

7点の出土がある。内訳は革帯に取り付けられたとみられる飾り金具（13～19）が6点と、それを取り付ける鉢（20）1点である。13～17は革帯の先端金具とのものと考えられる。13は2.21×2.51cmの大きさで先端部を丸く仕上げている。また、端部は約0.5cm程折り曲げられている。鉢は、4箇所に残存している。製法は銅板に鍍金し、端部に縫を作りながら折り曲げていったと想定できる。14・15は基本的に13と同じ形態・製法と推される。2.51×2.09cmを測り、端部を約3mm折り返す。さらに、中央部にハート型の透かしを設けている。鉢は、3箇所付けられていたが2箇所が残存している。15・16・17についても14と同形態であろう。しかし、17・18には、列点文が刻まれており、他のものとは違った用途に使用されていた可能性がある。

19は、2.05×0.55cmの大きさで両端に鉢が打たれている。鉢の頭部を含む表側全体に鍍金が施されている。便宜上、当項に示してあるが馬具類の一部であるかもしれない。

鉢

20は直径6.9cm、長さ1.01cmの鉢である。頭部は、浅いドーム状に成形され、表面には鍍金が施されている。



0 5CM

J 青銅鏡（第20図1・2）

第7図B地点より近接して2面の
鏡が出土した。1は、珠文鏡で裏面

第20図 青銅鏡実測図

を上にして激しく破損した状態で検出された。その後の保存処理などではほぼ完形に近く修復されたが文様構成を把握するのが難しいほど腐食が激しく進行している。直径7.49cm、厚さ平均2mmを測る。鏡の中央には円形の紐（紐径1.41cm、高さ0.42cm）が置かれ紐孔はきれいに貫通している。紐の外側には1条の圓帶を巡らして紐座としている。さらにその外側には主文様である珠文を2列に配置しているが腐食のため配列の判断は非常に難しい。通常の珠文鏡の周囲には、櫛目文帯、鋸齒文帯がみられるが本鏡においては観察できない。

櫛目文鏡

2は櫛目文鏡である。櫛目文鏡は現在のところ四乳のあるものとないものに分類されているが、本鏡は後者に属している。直径6.11cm、厚さ平均2mmを測り、良好な鋳上がりを呈している。紐は円形で紐径1.68cm、高さ0.83cmの大きさで紐孔の貫通状態もしっかりとしている。紐の外側には、4条の圓帶が巡らされ、その外側に放射状に幅3.5mmの櫛目文が配されている。

◎ 土器類（第21～25図）

本節の冒頭でも述べたとおり、石室内より検出された土器類はほとんどなく図示できるものはない。図示し得るものの大半は、石室入り口周辺の攪乱や南側下方に果樹經營のために昭和期に構築された石積みの裏込めや盛り土から採取したものである。周囲約30m以内には他の古墳は現在のところ確認されておらず、ここで出土した土器類は本古墳に埋納された副葬品に間違いないと考えられる。

A 須恵器（第21～24図）

a 坏蓋（第21図1～18）

1～4は体部はやや扁平で最大径が12cm前後を測り、外面に沈線がはっきりと表れる。5～7は最大径が11cm程度で体部がやや球形に近い。さらに8・9では最大径が縮小し9～10cm程度になる。10～13は浅いつくりとなり、蓋に受けが付く。最大径は14.8～18.4cmと一定していない。また、10には扁平擬宝珠状のつまみがが頂部に付されている。14～18は最大径16cm前後を測り浅いつくりの体部を持つ。受けは消失する。

b 坏身（第21図19～30）

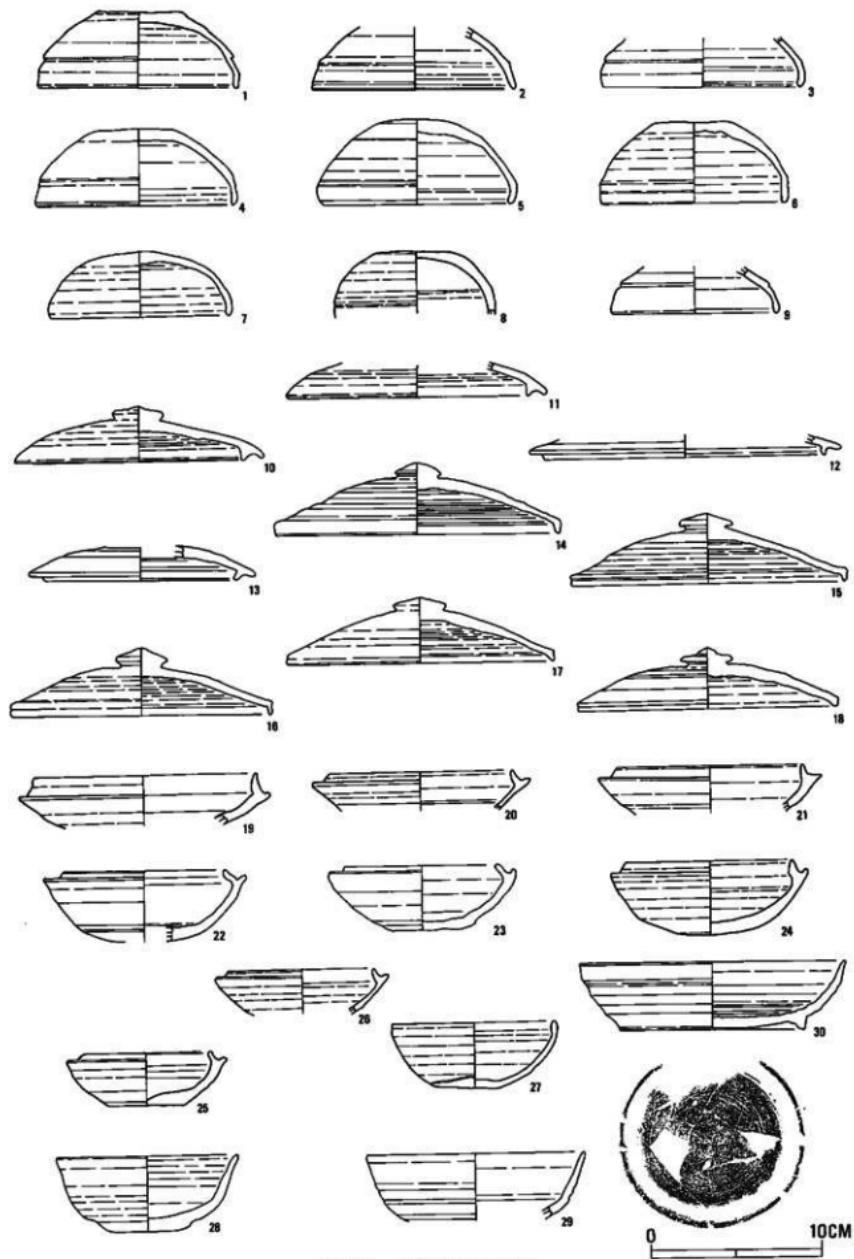
19は口縁部に受けをやや長く直立させているもので全体に扁平な体部を持つ。最大径は15cm前後を測る。20・21は受けが短くなる。また、19より内深が深くなるが最大径は約13cmと減少する。さらに22～24では受けが短縮され内深が増す。最大径は11cm前後となる。25・26は9～10cm程度の最大径を持つ。受けは前述のものより内傾する。27は受けがなく最大径は9.8cmを測る。28・29は体部のノタメがはっきりとしており底部近くが締まっている。30は約16cmの最大径を測り、高台を有する。底部には釜印が観察され高台と同一の高さを持つ。

c 高坏（第22図31・32）

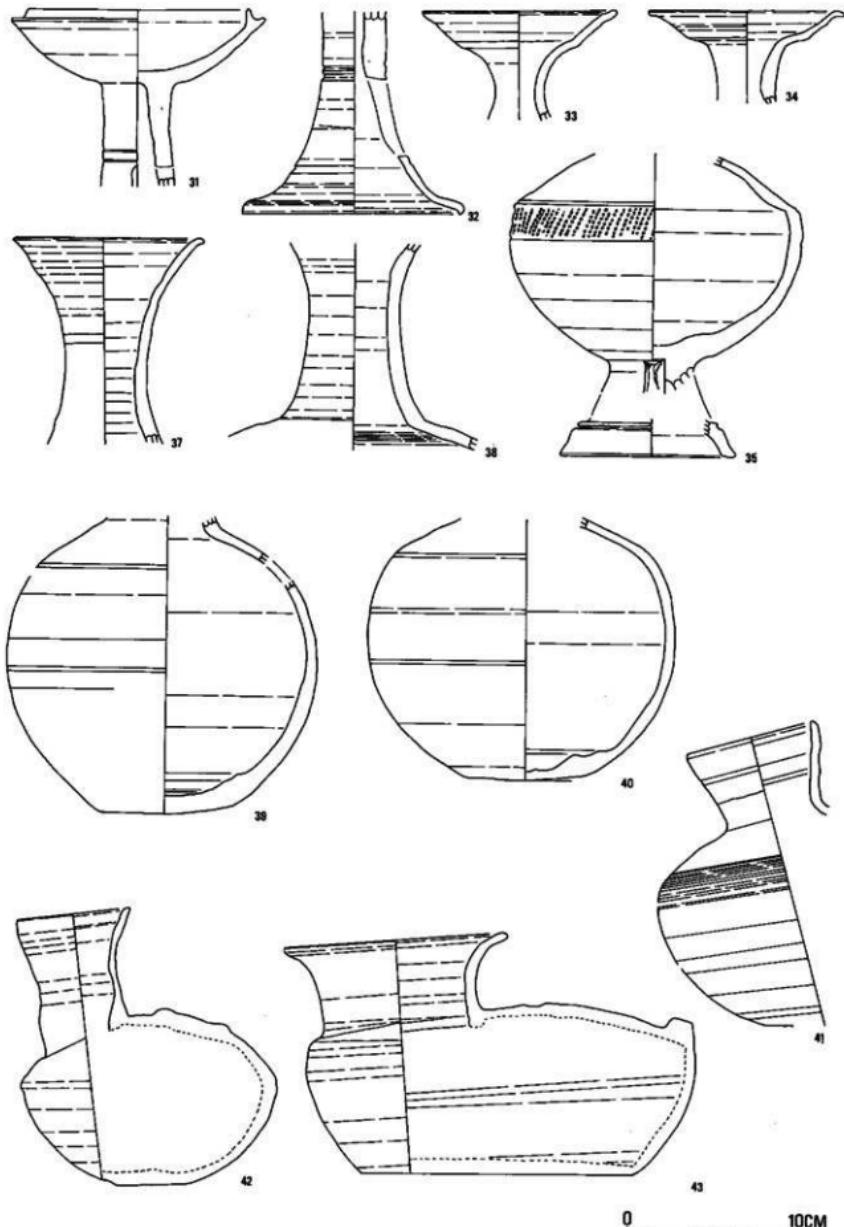
2点ともに2方向の透かしを有し、脚部の中央に2条の沈線が入る長脚2段透高坏である。31は脚部の過半を欠損している。坏部は最大径15.0cmを測り、やや直立した口縁を持つ。32は脚部のみの検出である。

d 球（第22図33・34）

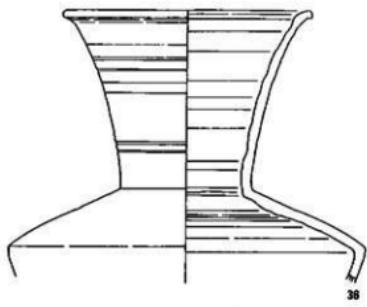
ともに口縁から頸部にかけてのみの残存状態で検出された。頸部は外縁気味に立ち上がり段をなして外反する口縁部に統く。口径は33が11.2cm、34は10.8cmを測る。



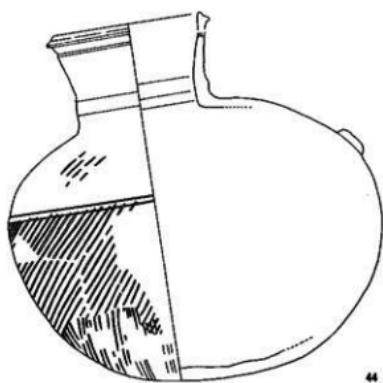
第21図 土器類実測図その1



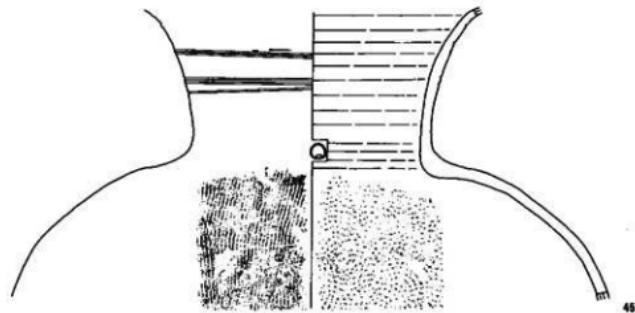
第22図 土器類実測図その2



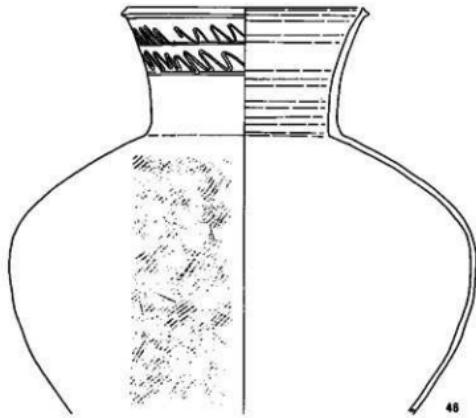
38



44



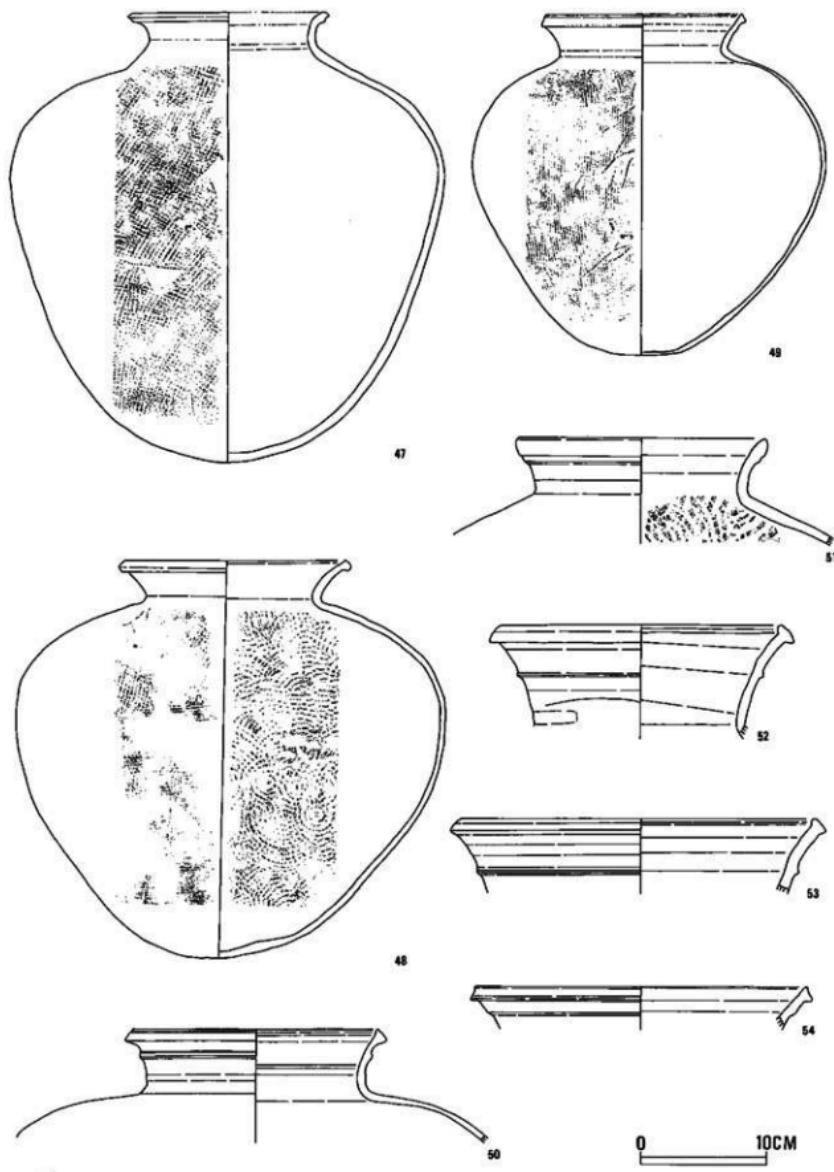
45



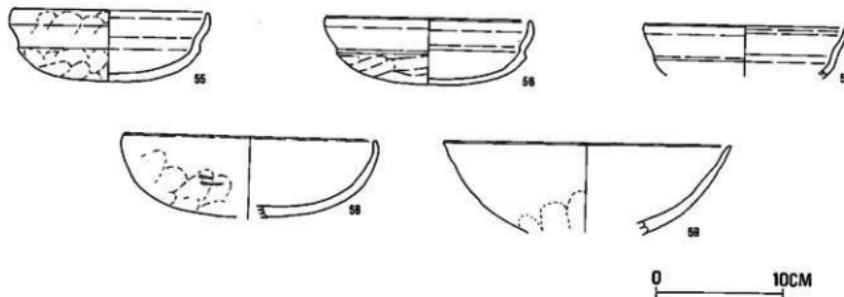
46

0 10CM

第23図 土器類実測図その3



第24図 土器類実測図その4



第25図 土器類実測図その5

e 長頸瓶 (第22図35~40)

35は蓋付長頸瓶である。口縁から頸部と脚の一部を欠損している。最大径は体部中央にとり17.4cmを測る。体部には2条の沈線がまわりその間に斜方向の櫛刺突文が施される。脚部は2段の裾広がりを呈し1段3方向の透かしが入る。36は大型長頸瓶である。体部の過半が欠損している。最大径を体部上半にとり28.6cmを測る。頸部から口縁部に向かっては外反気味に広がる形状を呈している。37・38は頸部のみの検出である。37は口径10.6cmを測り、弧状に大きく外反するのに対して38はやや直線を残しながら外彎させる傾向を有している。39・40は頸部を欠損している。法量はほぼ同一で体部中央付近に最大径(18.4cm)を持つ。

f 平瓶 (第22図41~43・第23図44)

41は1/2ほど体部が欠落している。口縁部から頸部はわずかに外側に向かって開放する円筒形を呈し短く直立している。体部は扁球形をしている。42はノタメが頸部に表れた円筒形の長い頸部を有し、体部は41よりもさらに扁平な球形を呈している。また、頂部に円形浮文が付く。43は明確な稜を持つ扁平な体部の頂部に把手を付す形状をとるものであるが本資料は把手部が欠損している。頸部は太く短く口縁に向かって大きく外彎している。44は最大径29.6cmを測る大型で体部はわずかに扁平な球形となっており2条の沈線がみられる。頸部は体部の中心軸からわずかにずれる形で取り付けられており太く短い。また、口縁近くに1条の沈線が廻されており、その下方には斜方向の叩き目がみられる。

g 大甕類 (第23図45・46・第24図47~54)

復元あるいは図示できるものは10点ある。45は頸部から肩部までが残存しているもので頸部下方に円形浮文を貼りつけている。頸部は、やや外反しながら開き沈線が廻る。46は肩部下方が欠損している。頸部は直線的に開口し、沈線で区画された中に波状文が施される。口唇部は引き延ばされている。47~49の3点はやや上半に腰の張った球形の胴部を持つ。頸部は短く47は弧状に外彎し48・49は「くの字」状に開口する。口唇部のつくりはそれぞれ三角形を呈している。50・51は口縁から肩部にかけての破片である。頸部はともに短く直線的に立ち上がる。口唇部のつくりは50は三角形、51は引き延ばす形状を取っている。52から54までは口縁から頸部までの破片である。口唇部のつくりはともに三角形状である。52については長い形状の頸部となっている。

B 土師器 (第25図55~59)

図示できるのは壺が5点のみである。55~57は体部外面に明瞭な段を有するものである。58は内溝す

る口縁を持ち内深はやや深い。59は直線的に開口しながら引き延ばされたつくりの口縁部を持つ。

第4章 まとめ

○馬具類

6世紀代になると乗馬の風習が各地に伝わり武器・武具類などに大きな影響を与えた。馬具は、基本的に金属・革・木製の部品によって構成されるが、古墳から出土するものは圧倒的に金属製品が多い。また、その結構状態も埴輪などを参考として理解されることが多い。山梨県下の古墳より出土する馬具類として多数を占めるのは、やはり他県の事例と同様に轡であり、他の部品との併存例は少ない。

轡

轡は現在のところ鏡板の形状によって二字・指円・心葉・花・素環・棒状などに大別されている。当墳においては、3点の素環鏡板付轡と一対の花形鏡板が検出されている。県内の状況では素環鏡板付轡は春日居町寺の前古墳や山梨市沖田無名墳などから同形状のものが出土しており検出例の大半を占める。鏡板の環径（A）と立闇の長さ（B）との比（B/A）から飛鳥時代の推定がなされている。立闇の残存あるいは痕跡の残る轡（第14図1・3）に当てはめてみるとその比は、1が0.56~0.69、2は0.50~0.55の範疇になる。このことから前者は7世紀第2四半世紀、後者が7世紀第1四半世紀に位置付けられる。

花形鏡板

統いて花形鏡板は県内の出土例は今までなく平林2号墳が初となる。花形鏡板の呼称は從来「九曜文鏡板」といわれていたが花卉の数量に個体差が生じてきたため「花形」と称されるようになってきた。また、詳細な編年研究がなされており「円形あるいはハート形の周縁に切れ込みを入れて周りを花卉状につくり、小型の円形に凹ませた装飾をもつ」と定義されている。近県では、浜松市駿塚古墳群1号墳・藤枝市蘆戸古墳群B20号墳・静岡市賤機山古墳など静岡県方面に類例を見る事ができる。坂本美夫氏により6世紀第3四半世紀後半から7世紀第2四半世紀頃の時期が抽出され4期に細分されている。その中のⅢ期である7世紀第1四半世紀から花形の打ち出し数が増加するタイプと減少するタイプに分岐していく。さらにⅢ期において水平あるいは下方に下がる傾向が強いことから本墳出土の花形鏡板は7世紀第1四半世紀に位置付けられるものと考えられる。

鞍

鞍は鐵金具・洲浜金具・などと共に鞍を構成する飾金具のひとつで県内では春日居町狐塚古墳・天神のこし古墳などからわずかに確認されているにすぎない。形態については、鉄具形式と円環形式の2形式がみられ本墳出土の鞍はすべて前者にあたる。鉄具形式の初現は5世紀第3四半世紀と古くそれ以後長期に渡って存在が認められる。しかし、今回出土した資料については須恵器や共伴している轡類などから7世紀前半代と考えている。

辻金具

辻金具は2点の出土をみたがその内、完形の状態を保っていたのは第図11のみである。飾紙などの装飾を持たない形態で鉢部が扁円形を呈し4本の脚を有するもので6世紀第2四半世紀から第4四半世紀を中心として存在が位置付けられている。本資料の時期的位置付けについては鞍と同様に7世紀前半代としておきたい。

○青銅鏡

珠文鏡

県内から出土した珠文鏡は甲府市伊勢町遺跡と同横模・桜井積石塚古墳群桜井B号墳からの2面あり双方とも珠文が1列巡るものである。今回検出されたものは、2列の珠文を持つものの様である。また、副面には櫛目文帯、鋸齒文帯があるが本鏡は破損・摩滅状態が不良であり判断できない。2列の珠文を持つタイプは、福岡県浮羽郡吉井町月の岡古墳・佐賀県唐津市佐志懶原1号墳・など15例ほどが知られており、近県においては、長野県飯田市桐林殿垣外古墳・岐阜県坂祝町黒岩前出古墳に出土例がある。

櫛目文鏡

櫛目文鏡は、櫛目文を珠文する鏡であり、県内においての出土は今までなく、出土例はわずかに中国

地方区の広島県尾道市西藤町永松古墳・岡山市一宮町天神山古墳・鳥取県倉吉市和田焼山6号墳にある。

現在のところ5世紀になると神獸鏡、珠文鏡、乳文鏡などの鏡があらわれ、6世紀になるとつれて小型化したとされている。今回出土した珠文鏡、横目文鏡についても鏡径が小型化した6世紀代に製作時期が位置付けられるものといえよう。

○ 須恵器

今回出土した須恵器は約50点ほどであり、年代を考えてみると6世紀後半から8世紀前半と幅を持つていくつかに分類できるようである。そこでここでは出土須恵器の分類と時期的な位置付けについてポピュラーな器種である壺類を中心に試案してみたい。

1 壺類

壺蓋（第26図1～18）

大きく5形式に分類できる。A-1（1～4）は体部はやや扁平で最大径が12cm前後を測り、外面に沈線がはっきりと表れるもので、本古墳からの出土はみない前時期よりも若干最大径が減少するものである。A-2（5～7）においては最大径が11cm程で体部がやや球形に近くなる。A-3（8・9）では最大径がさらに縮小し9～10cm程度になる。A-4（10～14）は浅いつくりとなり、蓋に受けが付く。最大径は14.8～18.4cmと一定していない様である。また、扁平瓶室珠状のつまみがが頂部に付される。A-5（14～18）は最大径16cm前後を測り浅いつくりの体部を持ち、受けは消失する。

壺身（第26図19～30）

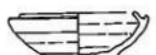
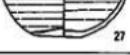
壺蓋よりも多く7形式に分類できる。B-1（19）は口縁部に受けをやや長く直立させているもので全体に扁平な体部を持ち、最大径は15cm前後を測るタイプである。B-2（20・21）は受けが短くなり、B-1より最大径は約13cmと減少するが内深が全体に増す。B-3（22～24）は受けがさらに短縮され内深も増加する。最大径は11cm前後となる。B-4（25・26）は9～10cm程の最大径を持ち、受けは前述のものより内傾する。B-5（27）においては受けがなく無くなり、最大径は9.8cmを測る。B-6（28・29）は体部のノタメがはっきりとしており底部近くが締まるものである。B-7（30）は約16cmの最大径を測り、高台を有する。底部には釜印が観察され高台と同一の高さを持つ。

以上の壺蓋・壺身の分類からセット関係を組み合わせてみると最古型式となるものはB-1（I期）であって壺蓋の検出はみられなかった。時期は、6世紀後半にあたろう。続いてA-1・B-2（II期）の組み合わせで6世紀末葉、A-2とB-3（III期）が7世紀前半、A-3・B-4・B-5（IV期）は645年前後の壺身と壺蓋が逆転する時に比定され、今回は出土をみなかつたが乳頭状のつまみを持つ壺蓋の出現時期にあたる。A-4・B-6（V期）は7世紀中葉に位置付けられ、7世紀後半に向かって壺蓋の受けが小型化していく時期となる。また、A-5・B-7（VI期）は受けが端部に移動した形態を持つタイプであり、時期は8世紀初頭と考えられる。

2 長頸瓶類

蓋付長頸瓶（第22図35）

蓋付長頸瓶の出土例は、近県では藤枝市に集中しており現在のところ原古墳群白砂ヶ谷支群・谷福業支群高草地区、湖西市西笠子古窯からの出土資料を中心に分類され編年が組まれている。それによると、

I		
II	1 2 3 4	 
III	5 6 7	  
IV	8 9	  
V	10 11 12 13	 
VI	14 15 16	

第26図 出土環類分類表

西笠子第64号窯出土の破片資料が最も古い型式とされている。その特徴は、2段の裾広がりで1~2段の2方向に透かしを施し、形式中最も高い脚高を示す。時期は6世紀末から7世紀初頭に位置付けられている。次型式の高草24号墳出土のものになると脚の透かしは消失し脚高も1/2程度に低くなる。体部は稜をなす肩部とその下位に沈線を巡らせ、その中に斜方向の櫛描刺突文を施している。また、西笠子第64号窯出土資料が「脚付」であるとすれば、高草24号墳は「台付」というイメージが強い。時期は7世紀第1・2四半世紀に比定されている。これらの事柄に本資料の特徴を重ね合わせていくと、脚部の特徴からいえば透かしの数こそ違いがみられるが最古形式に近い範疇に入るものと考えられる。しかし、残念ながら西笠子第64号窯資料には体部の全容を明らかに出来るものはない。他方、体部だけをみるとすれば高草24号墳出土資料にスタイルや施文など類似点が多くみられる。このことなどから非常に短絡的な考えではあるが今のところ本資料を両者の中間的な位置に置いておき類似資料の増加を待ちたい。

大型長頸瓶（第23図36）

今回出土した大型長頸瓶は1点のみで体部が肩部やや下寄りから下方が欠損しているものの特徴が良く見られる資料である。「静岡県の窯業遺跡」によると体部の形状から球形を呈し列点文を施すものと肩の張る逆台形状を呈し無文の形状を示す2型式に分類されている。これらの時期については前者が8世紀第1四半世紀、後者が8世紀第2四半世紀とされている。当該資料についてはその形態的に後者の特徴を摂むものといえよう。

3 大甕（第23図45・46・第24図47~54）

図示し得るものは10点の内、大まかに外観を眺めるといくつかは2時期分類できそうである。まず、6世紀末葉から7世紀第2四半世紀に考えられるものとして第23図45・46が挙げられる。当時期の特徴としては、頸部に沈線で区画された波状文が施される他に円形浮文なども貼りつけられ、口唇部は三角形の断面を基本とするようであるが端部を上下に引き延ばすつくりもみられる。また、口縁部下方に凸線を配することや口唇部のつくりなどから第24図50~54については8世紀第1四半世紀後半に位置付けて良いものと考えられよう。

第5章 おわりに

甲府市北東部から春日居町にかけての甲府盆地縁辺部には多くの古墳が築かれており数十基のまとまりを持って古墳群を各所に形成している。なかでも春日居町地区の山間を占める春日居古墳群は9支群約40基からなる有力古墳群であることが近年の発掘調査やその他の地域研究で明らかとなりつつある地域と言えよう。

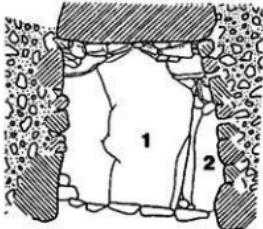
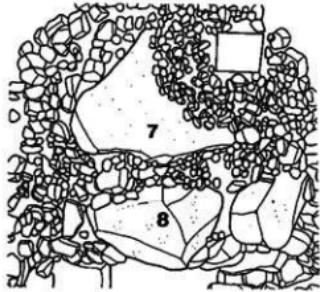
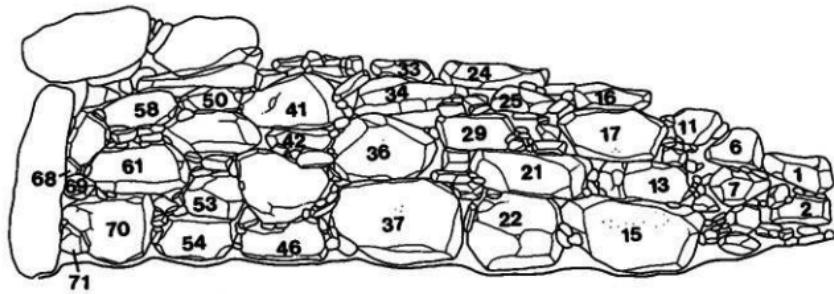
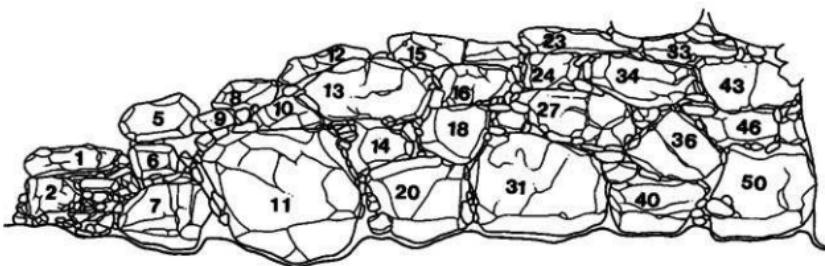
古墳の築造時期については、現段階においては検出された須恵器の編年から6世紀後半から末葉と考えている。その後、7世紀前葉から中葉にかけて多くの遺物が副葬されている。また、7世紀後葉から末葉の間は空白期間となり壺類、平瓶、長頸瓶などから8世紀初頭から8世紀第2四半世紀まで追葬が行われたことが検証される。

本古墳は、墳丘盛土の削平や天井石の持ち出しなどで外見こそ変容してはいたが、その残存していた石室規模は極めて良好であり、鏡2面の副葬は県内の後期古墳のなかでも注目に値する。また、豊富な装身具類、馬具・武器類についても被葬者の優位性を示すのに充分な資料であろう。今後、今回得られた資料を分析研究することによって本県の後期以降の古墳研究に一石を投じることは間違いない。

最後に調査に参加された方々をはじめ関係の方々に厚く謝意を表する次第であります。

《引用・参考文献》

- 浜松市教育委員会 1988 半田山古墳群（IV中支群－浜松医科大学内－）
- 浜松市教育委員会 1991 瓦屋西古墳群
- （財）浜松市文化協会 1986 四ツ池古墳群
- （財）浜松市文化協会 1989 半田山F古墳群
- （財）浜松市文化協会 1990 瓦屋西古墳群II
- 藤枝市教育委員会 1977 藤枝市原古墳群越ヶ谷支群B地区発掘調査報告書
- 藤枝市教育委員会 1980 市部古墳群山ノ神支群・藤田古墳群三ツ池支群
- 藤枝市教育委員会 1980 原古墳群白砂ヶ谷支群
- 藤枝市教育委員会 1980 埋蔵文化財発掘調査報告書II－古墳時代偏－南新屋古墳群秋合支群・
萩ヶ谷支群
- 藤枝市教育委員会 1981 原古墳群谷稻葉支群高草地区
- 焼津市教育委員会 1987 道添遺跡
- 同部町教育委員会 1982 横添古墳群板沢支群発掘調査報告書
- 静岡県教育委員会 1989 静岡県の窯業遺跡
- 須坂市教育委員会 1992 本郷大塚古墳
- 山梨県教育委員会 1988 四ツ塚古墳群
- 山梨県教育委員会 1988 稲荷塚古墳
- 山梨県教育委員会 1993 桑戸（後町）遺跡
- 甲府市教育委員会 1991 横根・桜井積石塚古墳群調査報告書
- 甲府市教育委員会 1992 甲府市遺跡地図
- 春日居町 1988 春日居町誌
- 春日居町教育委員会 1976 天神のこし古墳
- 春日居町教育委員会 1979 笹原塚3号墳
- 春日居町教育委員会 1989 倉田遺跡
- 山梨学院大学・石和町教育委員会 1984 大藏経寺山第15号墳
- 石和町誌 1987 石和町誌
- 後藤守一 1939 上古代鉄器の年代研究 「人類学雑誌」54巻4号
- 水野敏典 1993 古墳時代後期の軍事組織と武器副葬－長頭鎌の形態変遷と計量の相関に
見る武器供給から－ 「古代」96号
- 宮沢公雄 1992 横根・桜井積石塚古墳群の再検討－分布調査の成果の検討から－
「帝京大学山梨文化財研究所研究報告」第4集



第27図 石室石材番付図

石室石材計測表

石室右側壁

単位cm・kg

NO	縦	横	控え	重量	備考
1	35	70	100	700	
2	34	65	130	800	
6	35	65	115	600	
7	42	33	73	500	
11	40	50	115	400	
13	42	90	105	900	
15	84	150	76	1300	
16	15	85	105	500	
17	51	113	90	1000	
18	10	35	80	100	
21	48	130	90	1200	
22	93	90	40	900	
24	25	110	95	500	
25	34	115	79	800	
29	38	80	90	800	
31	12	35	76	100	
32	18	21	56	100	
33	10	60	80	300	
34	44	150	103	1200	
36	74	116	90	1300	
37	115	146	70	2000	
38	11	49	75	200	
39	10	40	70	100	
40	13	33	52	100	
41	62	107	84	1000	
42	22	60	92	400	
44	75	105	85	1500	
46	60	88	87	900	
47	15	50	80	300	
48	20	48	70	200	
49	21	100	120	600	
50	27	89	123	600	
51	50	80	98	900	
53	50	59	86	500	
54	56	90	77	900	
55	18	16	44	200	
56	15	37	60	100	

単位cm・kg

NO	縦	横	控え	重量	備考
57	10	15	45	100	
58	38	80	73	600	
61	57	5	84	800	
63	20	30	47	100	
66	30	93	80	500	
67	54	37	68	300	
69	24	34	57	100	
70	72	90	90	1200	
71	37	35	85	300	

石室左側壁

単位cm・kg

NO	縦	横	控え	重量	備考
1	30	95	120	1000	
2	55	62	100	700	
3	40	80	119	900	
5	40	90	100	1000	
6	55	50	120	600	
7	60	105	95	1000	
8	30	70	120	700	
9	20	35	50	100	
10	40	86	112	800	
11	135	160	70	2500	
12	25	85	90	300	
13	68	143	100	1800	
14	45	64	80	700	
15	30	147	100	1000	
16	56	83	104	800	
18	55	60	90	700	
20	103	103	75	1600	
23	16	51	78	300	
24	40	50	112	500	
27	53	130	103	1000	
30	18	30	54	100	
31	120	150	110	700	
33	30	100	70	300	
34	50	96	83	900	
36	83	85	107	1900	
38	25	37	93	200	
40	40	107	105	1200	
43	60	120	83	1000	
45	15	38	50	100	
46	32	89	90	700	
49	28	27	70	200	
50	97	115	151	2300	
70	13	34	58	200	
71	11	52	80	200	

石室奥壁

単位cm・kg

NO	縦	横	控え	重量	備考
1	70	225	156	3600	
2	60	110	170	1400	
3	30	55	35	200	
4	45	64	137	700	

石室天井

単位cm・kg

NO	縦	横	控え	重量	備考
2	15	48	55	100	
5	30	35	50	100	
7	46	170	210	2400	
8	145	76	40	900	

裝身具類計測表

《管 玉》

单位cm · g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備 考
1	淡緑色	2.30	0.66	0.23-0.12	1.92		完存	

《棗 玉》

单位cm · g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備 考
2	暗茶褐色	-	1.03	0.33--	0.62	琥珀	1/2欠損	

《勾 玉》

单位cm · g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	厚	重量	材質	残存状況	備 考
3	淡緑色	3.01	1.02	0.30-0.24	1.11	9.15	翡翠	完存	
4	乳黃白色	2.89	0.82	0.30-0.28	0.81	5.28	瑪瑙	♦	
5	淡緑色	1.98	0.69	0.24-0.16	0.65	3.21	翡翠	♦	
6	緑色	-	0.74	0.21-0.18	0.77	3.45	鉛ガラス	1/2欠損	

《切子玉》

单位cm · g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備 考
7	透明	0.99	0.87	0.27-0.12	1.05	水晶	完存	

《蜻蛉玉》

单位cm · g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備 考
8	紺色	1.02	1.26	0.32-0.25	2.13	7%カリ石灰ガラス	完存	クラックが入る
9	♦	1.03	1.19	0.39-0.32	1.92	♦	♦	
10	♦	1.07	1.20	0.28-0.27	2.23	♦	♦	

《丸玉1》

单位cm · g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備 考
1	淡水色	0.92	1.23	0.41-0.04	1.83	7%カリ石灰ガラス	完存	
2	淡緑色	1.05	1.21	0.27-0.13	1.93	♦	1/2欠損	
3	淡水色	1.07	1.36	0.39-0.31	2.59	♦	完存	
4	♦	1.05	1.26	0.34-0.33	2.08	♦	♦	
5	紺色	0.73	1.13	0.30-0.30	1.26	♦	♦	
6	淡水色	0.64	1.09	0.30-0.25	1.09	♦	♦	
7	紺色	0.84	1.24	0.32-0.22	1.80	♦	♦	
8	♦	0.79	1.18	0.31-0.25	1.38	♦	♦	
9	♦	0.72	1.21	0.36-0.33	1.40	♦	♦	
10	淡水色	1.06	1.28	0.40-0.37	2.07	♦	♦	
11	♦	1.07	1.29	0.34-0.34	2.14	♦	♦	
12	薄乳緑色	1.08	1.16	0.25-0.24	2.22	滑石	♦	
13	紺色	0.70	1.10	0.28-0.25	1.12	7%カリ石灰ガラス	♦	
14	淡水色	1.12	1.33	0.35-0.34	2.62	♦	♦	

《丸玉2》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備考
15	紺色	0.65	1.09	0.300-0.26	1.04	陶器石灰ガラス	完存	
16	濃水色	1.04	1.31	0.330-0.31	2.37		タ	
17	紺色	0.67	1.15	0.32-0.28	1.30		タ	
18	タ	0.76	1.22	0.35-0.27	1.56		タ	
19	タ	0.73	1.16	1.34-0.24	1.21	タ	タ	
20	タ	0.74	1.09	0.28-0.23	1.15	タ	タ	
21	タ	0.75	1.10	0.28-0.22	1.24	タ	タ	
22	タ	0.76	1.08	0.26-0.21	1.13	タ	タ	
23	タ	0.73	1.19	1.33-0.29	1.51	タ	タ	
24	濃水色	1.01	1.31	0.32-0.31	2.37	タ	タ	
25	紺色	0.67	1.09	0.31-0.27	1.06	タ	タ	
26	タ	0.81	1.21	0.34-0.27	1.58	タ	タ	
27	タ	0.68	1.18	0.32-0.29	1.28	タ	タ	
28	タ	0.76	1.13	0.30-0.23	1.32	タ	タ	
29	タ	0.90	1.02	0.28-0.27	1.17	タ	タ	
30	タ	0.75	1.07	0.32-0.28	1.23	タ	タ	
31	タ	0.88	1.06	0.25-0.23	1.22	タ	タ	
32	タ	0.82	1.01	0.27-0.24	1.05	タ	タ	
33	タ	1.06	1.32	0.34-0.32	2.18	タ	タ	タツカが入る
34	タ	0.89	1.02	0.25-0.24	1.17	タ	タ	
35	タ	0.89	1.04	0.28-0.25	1.16	タ	タ	
36	タ	0.65	1.09	0.30-0.26	1.10	タ	タ	
37	濃緑色	1.00	1.17	0.40-0.28	1.48	鉛ガラス	1/2欠損	
38	タ	1.00	1.21	0.27-0.24	3.69	タ	完存	
39	紺色	0.87	1.07	0.28-0.25	1.08	陶器石灰ガラス	タ	
40	タ	0.72	1.15	0.28-0.23	1.33	タ	タ	
41	タ	0.91	1.04	0.28-0.20	—	タ	1/2欠損	
42	タ	1.07	1.06	0.29-0.18	1.48	タ	完存	
43	タ	0.85	1.04	0.27-0.24	1.18	タ	タ	
44	タ	0.83	1.10	0.26-0.24	1.12	タ	タ	
45	濃水色	0.94	1.25	0.40-0.38	1.92	タ	タ	
46	タ	1.02	1.37	0.44-0.39	2.44	タ	タ	
47	タ	1.01	1.34	0.38-0.37	2.41	タ	タ	
48	タ	1.07	1.31	0.34-0.31	2.45	タ	タ	
49	淡緑色	1.16	1.27	0.33-0.30	2.64	鉛ガラス	タ	タツカが入る
50	紺色	0.75	1.28	0.29-0.28	1.68	陶器石灰ガラス	タ	
51	濃水色	0.92	1.26	0.32-0.28	1.98	タ	タ	
52	紺色	0.92	1.06	0.31-0.26	1.33	タ	タ	床石下

《丸玉3》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備考
53	濃水色	1.00	1.34	0.35-0.33	2.44	タケガワ石灰ガラス	完存	
54	タ	1.08	0.32	0.33-0.32	2.49	タケガワ石灰ガラス	タ	
55	紺色	0.79	1.17	0.29-0.22	1.48	タケガワ石灰ガラス	完存	床石下
56	乳白色	0.86	1.36	0.37-0.33	2.02	船ガラス	タ	
57	紺色	0.68	1.07	0.31-0.24	0.88	タケガワ石灰ガラス	タ	
58	タ	0.78	0.94	0.26-0.25	0.91	タ	タ	
59	タ	0.84	1.09	0.28-0.25	1.29	タ	タ	
60	タ	0.82	0.94	0.23-0.22	0.93	タ	タ	
61	タ	0.88	1.00	0.25-0.23	1.16	タ	タ	
62	タ	0.75	1.17	0.24-0.19	1.44	タ	タ	
63	タ	0.79	1.08	0.30-0.24	1.21	タ	タ	
64	タ	0.87	1.08	0.25-0.24	1.00	タ	タ	
65	濃水色	1.06	1.35	0.38-0.32	2.52	タ	タ	
66	紺色	0.91	1.03	0.26-0.24	1.05	タ	1/3欠損	タ
67	濃水色	0.79	1.12	0.33-0.27	1.33	タ	完存	タ
68	タ	1.04	1.30	0.36-0.35	2.31	タ	タ	水洗選別
69	タ	0.87	1.26	0.36-0.34	1.87	タ	タ	タ
70	タ	1.00	1.32	0.34-0.33	2.35	タ	タ	タ
71	紺色	0.78	1.17	0.27-0.23	1.48	タ	タ	タ
72	タ	0.79	1.22	0.29-0.25	1.64	タ	タ	タ
73	タ	0.73	1.19	0.28-0.26	1.42	タ	タ	タ
74	タ	0.94	1.03	0.25-0.19	1.37	タ	タ	タ
75	タ	0.76	1.16	0.32-0.25	1.46	タ	タ	タ
76	タ	0.87	1.04	0.28-0.25	1.17	タ	タ	タ
77	タ	0.88	1.01	0.28-0.26	1.17	タ	タ	タ
78	タ	0.84	1.03	0.26-0.25	1.07	タ	タ	タ
79	濃水色	0.97	1.04	0.24-0.18	1.47	タ	タ	タ
80	紺色	0.85	1.01	0.26-0.25	1.20	タ	タ	タ
81	タ	0.82	0.99	0.27-0.22	1.08	タ	タ	タ
82	タ	0.87	0.99	0.25-0.24	1.10	タ	タ	タ
83	タ	0.85	1.03	0.27-0.26	1.13	タ	タ	タ
84	タ	0.80	1.01	0.26-0.23	1.09	タ	タ	タ
85	タ	0.79	1.03	0.27-0.24	1.10	タ	タ	タ
86	濃水色	0.93	1.05	0.24-0.21	1.45	タ	タ	タ
87	乳紺色	0.75	1.01	0.31-0.19	1.11	船ガラス	タ	タ
88	紺色	-	-	-	1.44	タケガワ石灰ガラス	-	タ
89	タ	0.67	0.81	0.14-0.13	0.65	タ	完存	
90	タ	0.59	0.80	0.21-0.20	0.56	タ	タ	

《丸玉4》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径(最大・最小)	重量	材質	残存状況	備考
91	タ	0.62	0.80	0.18-0.16	0.63	タ	タ	
92	タ	0.57	0.76	0.14-0.13	0.54	タ	タ	
93	タ	0.64	0.85	0.16-0.14	0.74	タ	タ	クラックが入る
94	タ	0.59	0.80	0.15-0.14	0.60	タ	タ	
95	漫水色	0.61	0.88	0.20-0.19	0.64	アカガリ石灰ガラス	完存	
96	紺色	0.60	0.80	0.20-0.18	0.51	タ	タ	
97	漫水色	0.63	0.78	0.21-0.20	0.55	タ	タ	
98	タ	0.60	0.82	0.16-0.15	0.59	タ	タ	
99	タ	0.58	0.80	0.20-0.19	0.54	タ	タ	
100	紺色	0.63	0.80	0.18-0.16	0.64	タ	タ	
101	タ	0.65	0.82	0.15-0.14	0.68	タ	タ	
102	タ	0.59	0.83	0.15-0.19	0.58	タ	タ	
103	タ	0.46	0.82	0.22-0.20	0.49	タ	タ	
104	タ	0.73	0.79	0.14-0.13	0.69	タ	タ	
105	タ	0.65	0.77	0.14-0.13	0.64	タ	タ	
106	タ	0.50	0.89	0.32-0.29	0.75	タ	タ	
107	漫水色	0.58	0.77	0.17-0.16	0.54	タ	タ	
108	紺色	0.52	0.79	0.18-0.16	0.50	タ	タ	
109	タ	0.70	1.08	0.25-0.24	1.03	タ	タ	
110	タ	0.57	0.78	0.16-0.15	0.54	タ	タ	
111	タ	0.61	0.93	0.24-0.23	0.81	タ	タ	水洗選別
112	漫紺色	0.54	0.84	0.19-0.18	0.58	タ	タ	タ
113	タ	0.64	0.88	0.16-0.15	0.71	タ	タ	タ
114	紺色	—	—	—	0.50	タ	タ	タ
115	タ	0.60	0.82	0.14-0.13	0.57	タ	タ	タ
116	タ	0.58	0.83	0.19-0.18	0.56	タ	タ	タ
117	タ	0.53	0.82	0.19-0.17	0.52	タ	タ	タ
118	タ	0.41	0.83	0.23-0.21	0.42	タ	タ	タ
119	漫水色	0.61	0.80	0.16-0.15	0.59	タ	タ	タ
120	紺色	0.62	0.74	0.13-0.12	0.51	タ	タ	タ
121	タ	0.52	0.80	0.15-0.14	0.51	タ	タ	タ

《小玉1》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径	重量	材質	残存状況	備考
1	漫水色	0.23	0.38	0.06	0.04	アカガリ石灰ガラス	1/2欠損	
2	タ	0.22	0.41	0.11	0.04	タ	完存	
3	タ	0.21	0.39	0.10	0.05	タ	タ	
4	タ	—	—	—	0.05	タ	タ	クラックが入る

《小玉2》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径	重量	材質	残存状況	備考
5	タ	0.25	0.41	0.13	0.06	タ	タ	
6	タ	0.25	0.40	0.10	0.05	タ	タ	
7	タ	0.22	0.37	0.10	0.04	タ	タ	
8	タ	0.26	0.46	0.13	0.07	タ	タ	
9	タ	0.24	0.42	0.11	0.06	タ	タ	
10	タ	0.29	0.44	0.13	0.06	タ	タ	タラッカが入る
11	淡水色	0.27	0.42	0.10	0.07	アクリル石灰ガラス	完存	
12	タ	0.28	0.43	0.14	0.07	タ	タ	
13	タ	0.25	0.46	0.12	0.07	タ	タ	
14	タ	0.24	0.44	0.07	0.06	タ	タ	
15	タ	0.24	0.43	0.09	0.06	タ	タ	
16	タ	0.27	0.41	0.05	0.07	タ	タ	
17	タ	0.26	0.42	0.09	0.06	タ	タ	
18	タ	0.27	0.43	0.09	0.07	タ	タ	
19	緑色	0.32	0.42	0.12	0.07	タ	タ	水洗選別
20	淡水色	0.26	0.45	0.15	0.05	タ	タ	タ
21	タ	0.23	0.40	0.15	0.04	タ	タ	タ
22	タ	0.23	0.38	0.10	0.04	タ	タ	タラッカが入り脆弱
23	緑色	0.25	0.44	0.12	0.07	タ	タ	タ
24	タ	0.20	0.37	0.10	0.05	タ	タ	タ
25	タ	0.25	0.38	0.13	0.05	タ	タ	タ
26	淡水色	0.28	0.40	0.07	0.07	タ	タ	タ
27	緑色	0.22	0.38	0.08	0.04	タ	タ	タ
28	タ	0.24	0.43	0.12	0.07	タ	タ	タ
29	淡水色	0.28	0.39	0.10	0.06	タ	タ	タ
30	タ	0.24	0.40	0.12	0.06	タ	タ	タ
31	タ	0.22	0.39	0.14	0.04	タ	タ	タ
32	タ	0.20	0.38	0.12	0.05	タ	タ	タ
33	タ	0.20	0.34	0.10	0.04	タ	タ	タ
34	タ	0.27	0.36	0.12	0.05	タ	タ	タ
35	タ	0.28	0.42	0.11	0.07	タ	タ	タラッカが入
36	水色	0.29	0.39	0.11	0.07	タ	タ	タ
37	緑色	0.30	0.40	0.11	0.06	タ	タ	タ
38	淡水色	0.24	0.46	0.12	0.07	タ	タ	タ
39	タ	0.26	0.42	0.11	0.07	タ	タ	タラッカが入る
40	タ	0.26	0.40	0.10	0.06	タ	タ	タ
41	タ	0.23	0.39	0.12	0.04	タ	タ	タ
42	タ	0.23	0.45	0.14	0.06	タ	タ	タラッカが入る
43	タ	0.21	0.37	0.10	0.05	タ	タ	タラッカが入る
44	水色	0.21	0.42	0.16	0.05	タ	タ	タ
45	淡水色	0.26	0.43	0.12	0.07	タ	タ	タラッカが入る

《小玉3》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径	重量	材質	残存状況	備考
46	△	0.24	0.40	0.15	0.06	△	△	△
47	緑色	0.20	0.36	0.09	0.03	△	△	△
48	濃水色	0.22	0.39	0.11	0.04	△	△	△
49	△	0.24	0.42	0.12	0.06	△	△	△
50	緑色	0.28	0.43	0.13	0.08	△	△	△クラックが入り脆弱
51	濃水色	0.24	0.41	0.10	0.05	△珪藻石灰ガラス	完存	水洗選別
52	△	0.25	0.42	0.12	0.06	△	△	△
53	△	0.26	0.44	0.13	0.07	△	△	△
54	水色	0.26	0.40	0.11	0.05	△	△	△
55	濃水色	0.25	0.45	0.14	0.07	△	△	△
56	△	0.21	0.40	0.08	0.05	△	△	△
57	△	0.27	0.38	0.10	0.05	△	△	△
58	△	0.30	0.38	0.09	0.06	△	△	△
59	水色	0.24	0.39	0.11	0.05	△	△	△
60	濃水色	0.25	0.41	0.05	0.06	△	△	△クラックが入る
61	△	0.25	0.39	0.09	0.05	△	△	△
62	△	0.24	0.44	0.12	0.06	△	△	△
63	△	0.25	0.40	0.13	0.05	△	△	△
64	水色	0.28	0.38	0.07	0.06	△	△	△
65	△	0.25	0.37	0.09	0.03	△	△	△
66	濃水色	0.26	0.41	0.12	0.06	△	△	△
67	△	0.28	0.36	0.10	0.05	△	△	△
68	△	0.29	0.41	0.11	0.07	△	△	△
69	水色	0.29	0.40	0.10	0.06	△	△	△
70	△	0.26	0.39	0.11	0.05	△	△	△
71	濃水色	0.25	0.37	0.09	0.04	△	△	△
72	△	0.30	0.40	0.12	0.06	△	△	△
73	水色	0.27	0.37	0.09	0.05	△	△	△
74	△	0.27	0.42	0.10	0.06	△	△	△
75	濃水色	0.27	0.44	0.10	0.07	△	△	△
76	水色	0.21	0.38	0.07	0.04	△	△	△
77	△	0.26	0.38	0.11	0.05	△	△	△
78	△	0.19	0.39	0.09	0.04	△	△	△
79	△	0.23	0.43	0.11	0.05	△	△	△
80	水色	0.27	0.43	0.15	0.06	△	△	△
81	△	0.24	0.40	0.11	0.05	△	△	△クラックが入る
82	濃水色	0.28	0.41	0.09	0.06	△	△	△
83	△	0.25	0.44	0.13	0.06	△	△	△
84	△	0.27	0.45	0.10	0.08	△	△	△
85	△	0.28	0.46	0.10	0.08	△	△	△
86	水色	0.24	0.44	0.11	0.06	△	△	△

《小玉4》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径	重量	材質	残存状況	備考
87	淡水色	0.28	0.42	0.12	0.06	◆	◆	△クラクが入り脆弱
88	◆	0.26	0.43	0.11	0.07	◆	◆	◆
89	◆	0.22	0.43	0.06	0.06	◆	◆	◆
90	◆	0.22	0.41	0.12	0.05	◆	◆	◆
91	淡水色	0.29	0.39	0.10	0.06	アルカリ石灰ガラス	完存	水洗選別
92	◆	0.27	0.45	0.14	0.07	◆	◆	◆
93	◆	0.23	0.42	0.09	0.06	◆	◆	◆
94	◆	0.24	0.39	0.11	0.05	◆	◆	◆
95	◆	0.27	0.43	0.11	0.07	◆	◆	◆
96	◆	0.23	0.42	0.11	0.06	◆	◆	◆
97	◆	0.26	0.44	0.12	0.07	◆	◆	◆
98	◆	0.26	0.44	0.11	0.07	◆	◆	◆
99	◆	0.24	0.45	0.11	0.06	◆	◆	◆
100	◆	0.22	0.47	0.14	0.07	◆	◆	◆
101	◆	0.25	0.45	0.10	0.07	◆	◆	◆
102	◆	0.27	0.42	0.10	0.07	◆	◆	◆
103	◆	0.29	0.42	0.11	0.07	◆	◆	◆
104	◆	0.24	0.43	0.11	0.06	◆	◆	◆
105	◆	0.22	0.43	0.13	0.06	◆	◆	◆
106	◆	0.25	0.45	0.13	0.06	◆	◆	◆
107	◆	0.25	0.44	0.10	0.07	◆	◆	◆
108	◆	0.22	0.37	0.12	0.04	◆	◆	◆
109	◆	0.28	0.38	0.05	0.05	◆	◆	◆
110	◆	0.29	0.40	0.12	0.07	◆	◆	◆
111	◆	0.27	0.40	0.13	0.06	◆	◆	◆
112	水色	0.24	0.37	0.10	0.05	◆	◆	◆
113	◆	0.31	0.38	0.05	0.06	◆	◆	◆
114	淡水色	0.26	0.40	0.14	0.05	◆	◆	◆
115	◆	0.26	0.40	0.14	0.06	◆	◆	◆
116	◆	0.26	0.39	0.13	0.05	◆	◆	◆
117	◆	0.24	0.39	0.11	0.04	◆	◆	◆
118	◆	0.25	0.43	0.12	0.06	◆	◆	◆
119	◆	0.25	0.44	0.11	0.07	◆	◆	◆
120	◆	0.25	0.38	0.11	0.05	◆	◆	◆
121	◆	0.28	0.41	0.09	0.06	◆	◆	◆
122	◆	0.24	0.43	0.14	0.06	◆	◆	◆
123	◆	0.25	0.45	0.16	0.07	◆	◆	◆
124	◆	0.32	0.44	0.08	0.08	◆	◆	◆
125	◆	0.28	0.40	0.14	0.05	◆	◆	◆
126	◆	0.29	0.37	0.13	0.05	◆	◆	◆
127	◆	0.27	0.42	0.12	0.06	◆	◆	◆

《小玉5》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径	重量	材質	残存状況	備考
128	水色	0.22	0.43	0.05	0.05	タ	タ	タラクが入る
129	タ	0.26	0.43	0.07	0.06	タ	タ	タ
130	淡水色	0.23	0.43	0.12	0.06	タ	タ	タ
131	淡水色	0.32	0.42	0.12	0.08	陶器石灰ガラス	完存	水洗選別
132	タ	0.28	0.43	0.09	0.07	タ	タ	タ
133	タ	0.24	0.41	0.11	0.05	タ	タ	タ
134	タ	0.28	0.42	0.13	0.06	タ	タ	タ
135	タ	0.22	0.42	0.13	0.06	タ	タ	タ
136	タ	0.27	0.42	0.12	0.06	タ	タ	タ
137	タ	0.29	0.41	0.11	0.07	タ	タ	タ
138	タ	0.25	0.37	0.11	0.05	タ	タ	タ
139	タ	0.27	0.42	0.13	0.07	タ	タ	タ
140	タ	0.26	0.39	0.11	0.06	タ	タ	タ
141	タ	0.27	0.40	0.12	0.06	タ	タ	タ
142	タ	0.29	0.40	0.11	0.06	タ	タ	タ
143	タ	0.23	0.44	0.12	0.06	タ	タ	タ
144	タ	0.12	0.41	0.13	0.05	タ	タ	タ
145	タ	0.25	0.43	0.12	0.06	タ	タ	タ
146	タ	0.26	0.39	0.08	0.06	タ	タ	タ
147	タ	0.24	0.42	0.13	0.06	タ	タ	タ
148	タ	0.23	0.42	0.14	0.05	タ	タ	タ
149	タ	0.27	0.43	0.10	0.07	タ	タ	タ
150	タ	0.23	0.42	0.12	0.06	タ	タ	タ
151	タ	0.26	0.42	0.12	0.07	タ	タ	タ
152	タ	0.22	0.42	0.17	0.05	タ	タ	タ
153	タ	0.20	0.42	0.12	0.05	タ	タ	タ
154	タ	0.22	0.41	0.13	0.05	タ	タ	タ
155	タ	0.30	0.39	0.09	0.07	タ	タ	タラクが入る
156	タ	0.28	0.43	0.10	0.07	タ	タ	タ
157	タ	0.27	0.41	0.12	0.07	タ	タ	タ
158	タ	0.28	0.42	0.09	0.06	タ	タ	タ
159	タ	0.28	0.41	0.11	0.07	タ	タ	タ
160	タ	0.28	0.40	0.11	0.06	タ	タ	タ
161	タ	0.24	0.43	0.12	0.06	タ	タ	タ
162	タ	0.23	0.39	0.12	0.05	タ	タ	タ
163	タ	0.31	0.38	0.08	0.06	タ	タ	タ
164	タ	0.28	0.42	0.11	0.07	タ	タ	タ
165	タ	0.22	0.42	0.13	0.05	タ	タ	タ
166	タ	0.24	0.39	0.14	0.05	タ	タ	タ
167	タ	0.30	0.42	0.11	0.07	タ	タ	タ
168	タ	0.31	0.43	0.12	0.08	タ	タ	タ

《小玉 6》

単位cm・g

NO	色調	全長	径	口径	重量	材質	残存状況	備考
169	緑色	0.20	0.37	0.09	0.04	タ	タ	タ
170	タ	0.22	0.30	0.06	0.04	タ	タ	タ
171	淡水色	0.25	0.45	0.13	0.07	アカリ石灰ガラス	完存	水洗選別
172	タ	0.29	0.42	0.11	0.07	タ	タ	タカラツカが入る
173	タ	0.27	0.44	0.11	0.07	タ	タ	タ
174	タ	0.28	0.47	0.12	0.09	タ	タ	タ
175	タ	0.23	0.44	0.11	0.06	タ	タ	タ
176	タ	0.23	0.44	0.13	0.06	タ	タ	タ
177	タ	0.29	0.44	0.12	0.07	タ	タ	タ
178	タ	0.23	0.44	0.11	0.06	タ	タ	タ
179	タ	0.29	0.41	0.12	0.05	タ	タ	タ
180	タ	0.25	0.43	0.13	0.06	タ	タ	タ
181	タ	0.27	0.43	0.12	0.06	タ	タ	タカラツカが入る
182	タ	0.25	0.44	0.13	0.07	タ	タ	タ
183	タ	0.25	0.46	0.14	0.07	タ	タ	タ
184	タ	0.24	0.43	0.11	0.06	タ	タ	タ
185	タ	0.24	0.44	0.14	0.06	タ	タ	タ
186	タ	0.24	0.43	0.13	0.06	タ	タ	タ
187	タ	0.25	0.43	0.12	0.07	タ	タ	タ
188	タ	0.28	0.43	0.12	0.07	タ	タ	タ
189	タ	0.27	0.43	0.13	0.07	タ	タ	タ
190	タ	0.29	0.33	0.16	0.07	タ	タ	タ
191	緑色	0.26	0.43	0.10	0.07	タ	タ	タ
192	タ	0.29	0.42	0.13	0.07	タ	タ	タ
193	淡水色	0.25	0.43	0.12	0.07	タ	タ	タ
194	タ	0.27	0.44	0.14	0.07	タ	タ	タ
195	タ	0.24	0.42	0.12	0.05	タ	タ	タカラツカが入る
196	タ	0.30	0.42	0.13	0.07	タ	タ	タ
197	タ	0.26	0.43	0.11	0.07	タ	タ	タ
198	緑色	0.26	0.40	0.08	0.06	タ	タ	タ
199	淡水色	0.23	0.40	0.09	0.06	タ	タ	
200	緑色	—	—	—	0.04	タ	タ	

《耳環 1》

単位cm・g

NO	長径	短径	厚	切れ目幅	重量	備考	
1	2.56	2.41	0.61	—		切れ目部分に鋸の付着	17378
2	2.61	2.40	0.61	—		×	17380
3	2.29	2.28	0.59	2.28			17377
4	2.36	2.17	0.56	0.14		切れ目部分にわずかな鋸の付着	17382
5	2.44	2.29	0.52	0.18			17384
6	1.60	1.53	0.36	—		全体に鋸の付着	17376
7	1.81	1.63	0.39	0.14		切れ目部分にわずかな鋸の付着	17379
8	1.72	1.60	0.30	0.29		全体に鋸の付着	17381
9	1.57	1.40	0.30	0.07		×	17383
10	1.51	1.38	0.31	0.19		×	17386
11	1.00	—	0.21	—		全体に鋸の付着	17387
12	1.30	1.28	0.28	0.20		×	17395

出土土器計測表

単位cm

NO	器種	残存状況	最大径	口径	器高	内深	その他
1	坏蓋	3/5残存	12.0	11.2	4.5	3.9	
2	坏蓋	小破片	12.2	11.9	—	—	
3	坏蓋	小破片	12.0	11.5	—	—	
4	坏蓋	ほぼ完存	12.0	11.6	4.5	3.7	
5	坏蓋	1/2残存	12.0	10.8	4.9	4.2	
6	坏蓋	3/5残存	11.1	10.7	4.7	4.2	
7	坏蓋	1/2残存	10.9	10.6	3.8	3.1	
8	坏蓋	2/5残存	9.7		—	—	
9	坏蓋	小破片	10.0	9.6	—	—	
10	坏蓋	1/2残存	14.8	14.6	3.2	1.7	つまみ径2.9
11	坏蓋	小破片	14.0	13.7	—	—	
12	坏蓋	小破片	18.4	16.4	—	—	
13	坏蓋	小破片	13.5	10.2	—	—	
14	坏蓋	4/5残存	17.0	16.6	4.2	2.6	つまみ径2.6
15	坏蓋	4/5残存	16.3	16.0	4.1	2.5	つまみ径3.1
16	坏蓋	3/5残存	15.5	15.2	4.0	2.3	つまみ径3.0
17	坏蓋	3/5残存	15.9	15.7	3.9	2.5	つまみ径3.7
18	坏蓋	4/5残存	15.3	14.8	3.7	2.6	つまみ径3.0
19	坏身	小破片	15.0	13.2	—	—	
20	坏身	小破片	13.0	10.8	—	—	
21	坏身	小破片	13.1	10.9	—	—	
22	坏身	2/5残存	12.0	9.5	—	—	
23	坏身	ほぼ完存	11.2	8.8	3.8	3.2	
24	坏身	3/5残存	11.6	9.8	4.3	3.6	
25	坏身	3/5残存	9.6	7.3	3.1	2.7	
26	坏身	小破片	10.4	8.6	—	—	
27	坏身	3/5残存	9.8	9.6	3.9	3.4	
28	坏身	4/5残存	10.8	10.6	4.5	3.7	
29	坏身	小破片	13.0	12.8	—	—	
30	坏身	4/5残存	15.7	15.6	4.0	3.3	
31	高坏	脚部1/2欠損	15.0	12.8	—	—	
32	高坏	脚部のみ残存	—	—	—	—	
33	瓶	体部欠損	—	11.6	—	—	
34	瓶	体部欠損	—	11.6	—	—	
35	蓋付長頸瓶	体部4/5残存	17.4	—	—	—	
36	大型長頸瓶	肩部下欠損	28.6	20.0	—	—	
37	長頸瓶	頸部残存	—	11.4	—	—	
38	長頸瓶	頸部残存	—	—	—	—	

単位cm

NO	器種	残存状況	最大径	口径	器高	内深	その他
39	長頸瓶	体部完存	18.4	—	—	—	
40	長頸瓶	体部4/5残存	18.4	—	—	—	
41	平瓶	1/2残存	—	7.4	17.6	17.1	
42	平瓶	4/5残存	15.0	7.8	16.4	15.6	
43	平瓶	4/5残存	23.1	13.4	14.3	13.4	
44	平瓶	4/5残存	29.1	12.0	29.1	28.1	
45	大甕	2/5残存	—	—	—	—	
46	大甕	1/2残存	30.2	25.2	—	—	
47	大甕	3/5残存	46.6	20.1	48.0	47.0	
48	大甕	4/5残存	46.2	23.7	42.5	41.8	
49	大甕	4/5残存	38.0	21.0	36.0	35.7	
50	大甕	2/5残存	—	18.4	—	—	
51	大甕	1/5残存	—	19.6	—	—	
52	大甕	小破片	—	22.5	—	—	
53	大甕	小破片	—	28.5	—	—	
54	大甕	小破片	—	26.6	—	—	
55	坏身(土師)	3/5残存	11.9	11.4	4.2	3.7	
56	坏身(土師)	3/5残存	12.5	10.8	3.9	3.5	
57	坏身(土師)	小破片	12.0	11.6	—	—	
58	坏身(土師)	小破片	15.0	14.6	—	—	
59	坏身(土師)	小破片	17.0	16.6	—	—	

図 版



発掘調査前の状況



古墳全景



石室全景



壠方および天井石



奥壁



石室根石検出状況



左側壁裏側トレンチ



右側壁裏側トレンチ



左側壁裏側
トレンチ
疊層検出状況



奥壁裏側トレンチ



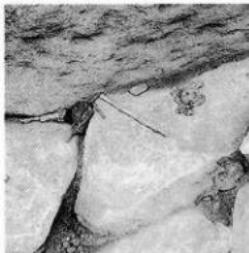
直刀・小札類出土状況



馬具類・鉄鎌・金環出土状況



青銅鏡・金環・把頭出土状況



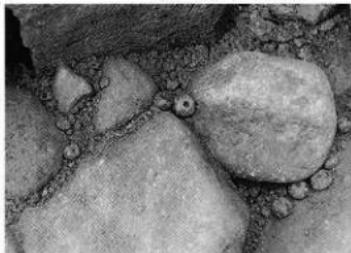
耜・鉄鎌等出土状況



辻金具・鉄鎌出土状況



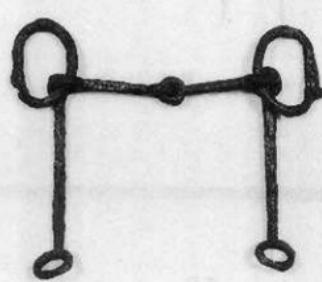
耜尻・資金具等出土状況



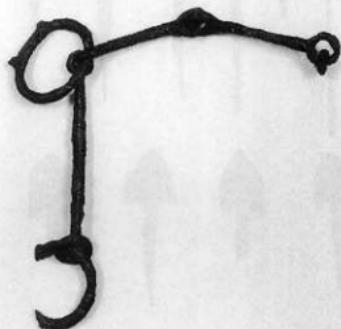
丸玉出土状況



勾玉・金環出土状況



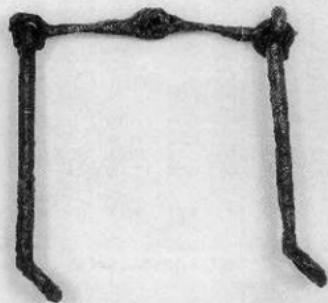
鉄製素環板付轡（1）



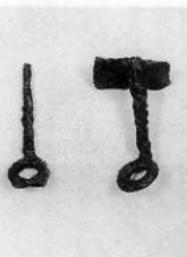
鉄製素環板付轡（2）



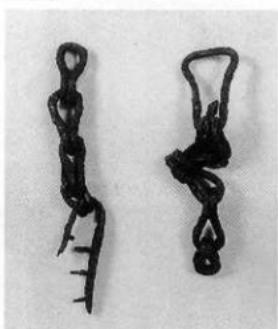
鐵製素環板付轡（3）



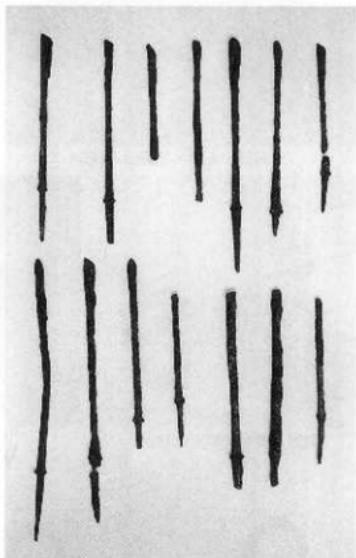
鐵製素環板付轡（4）



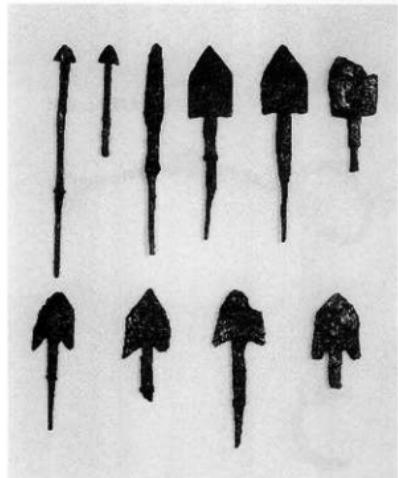
引手（5・6）



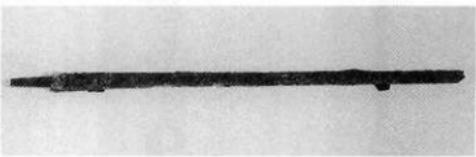
兵庫鎖（9・10）



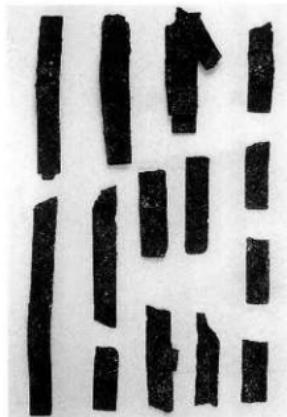
鐵鎗（11～24）



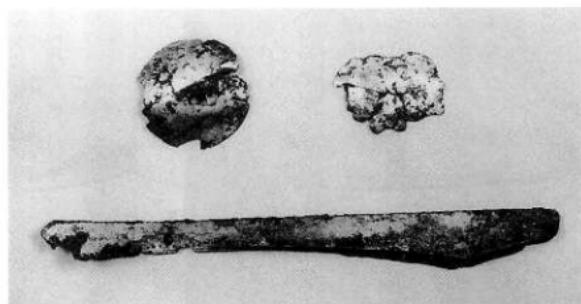
鐵鎗（1～10）



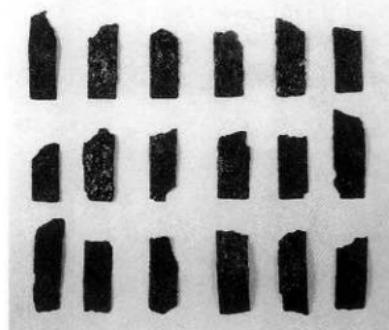
直刀



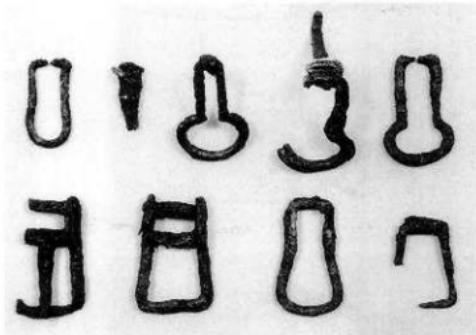
小札 (1~14)



用途不明金具 (13~15)



小札 (15~32)



軸・鉗具 (3~12)



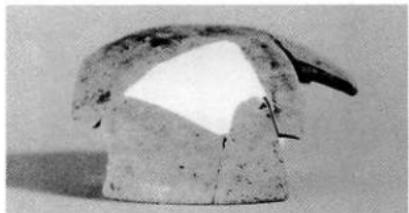
1



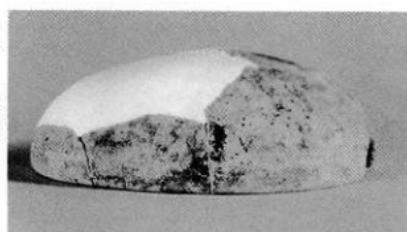
4



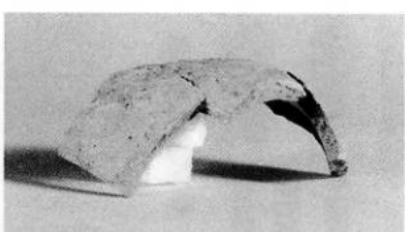
5



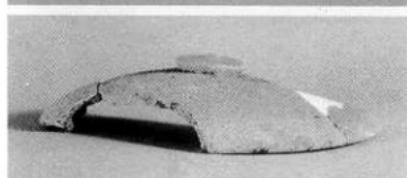
6



7



8



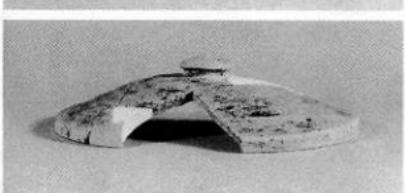
10



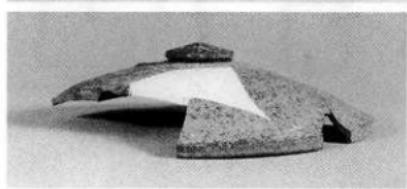
14



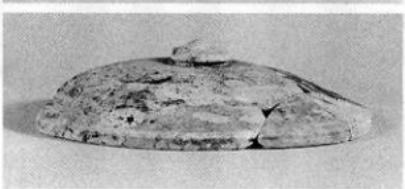
15



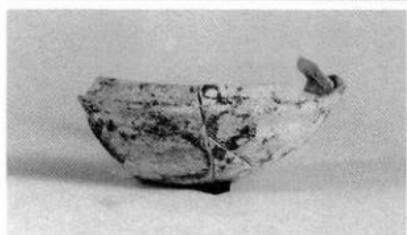
16



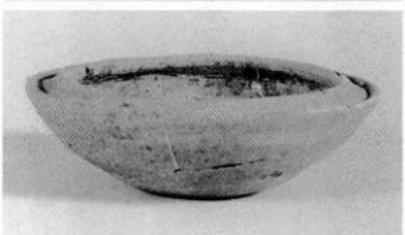
17



18



22



23



24



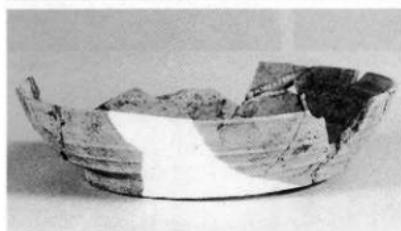
25



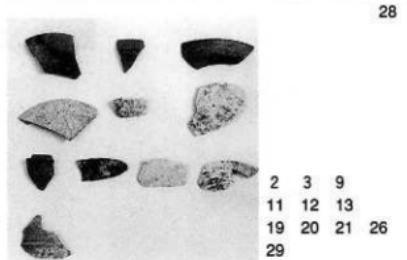
27



28



30



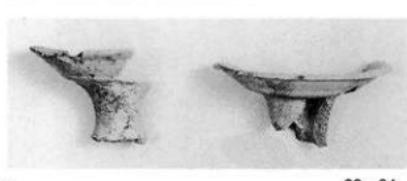
2	3	9	
11	12	13	
19	20	21	26
29			



31



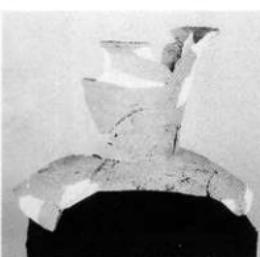
32



33 34



35



36



37 38



39



40



41



43



42



44



45



46



47



49



48



50

圖版 9 土器類 調查風景 等



試掘調查風景
1



石室解體工
1



試掘調查風景
2



石室解體工
2



發掘調查風景
1



發掘調查風景
2



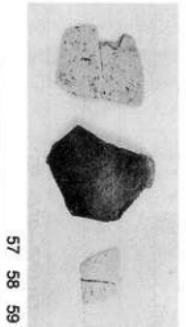
水洗選別風景



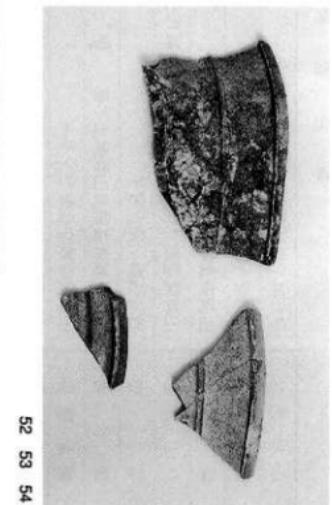
57 58 59



55 56



52 53 54



51

報告書抄録

ふりがな	ひらばやしにごうふん
書名	平林2号墳
副題	西関東連絡道建設に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告第175集
著者	吉岡弘樹・深沢容子
発行者	山梨県教育委員会山梨県土木部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL055-266-3016
印刷所	株式会社 少國民社
発行日	2000年3月3日
概要	山梨県東山梨郡春日居町鏡目字平林2405-1外
	25,000分の1地形図石和
	位置東経138°18'37"北緯35°39'36"標高305m
	市町村コード19301
要	古墳時代後期～終末期
	主な遺構 横穴式石室
	主な遺物 須恵器馬具類武具・武器類装身具類青銅鏡
	特記事項
	調査期間 1998年4月16日～10月23日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第175集

平林2号墳

印刷日 2000年2月25日
 発行日 2000年3月3日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 山梨県東八代郡中道町下曾根923番地
 TEL055-266-3016・3881
 発行 山梨県教育委員会
 山梨県土木部
 印刷 株式会社 少國民社

